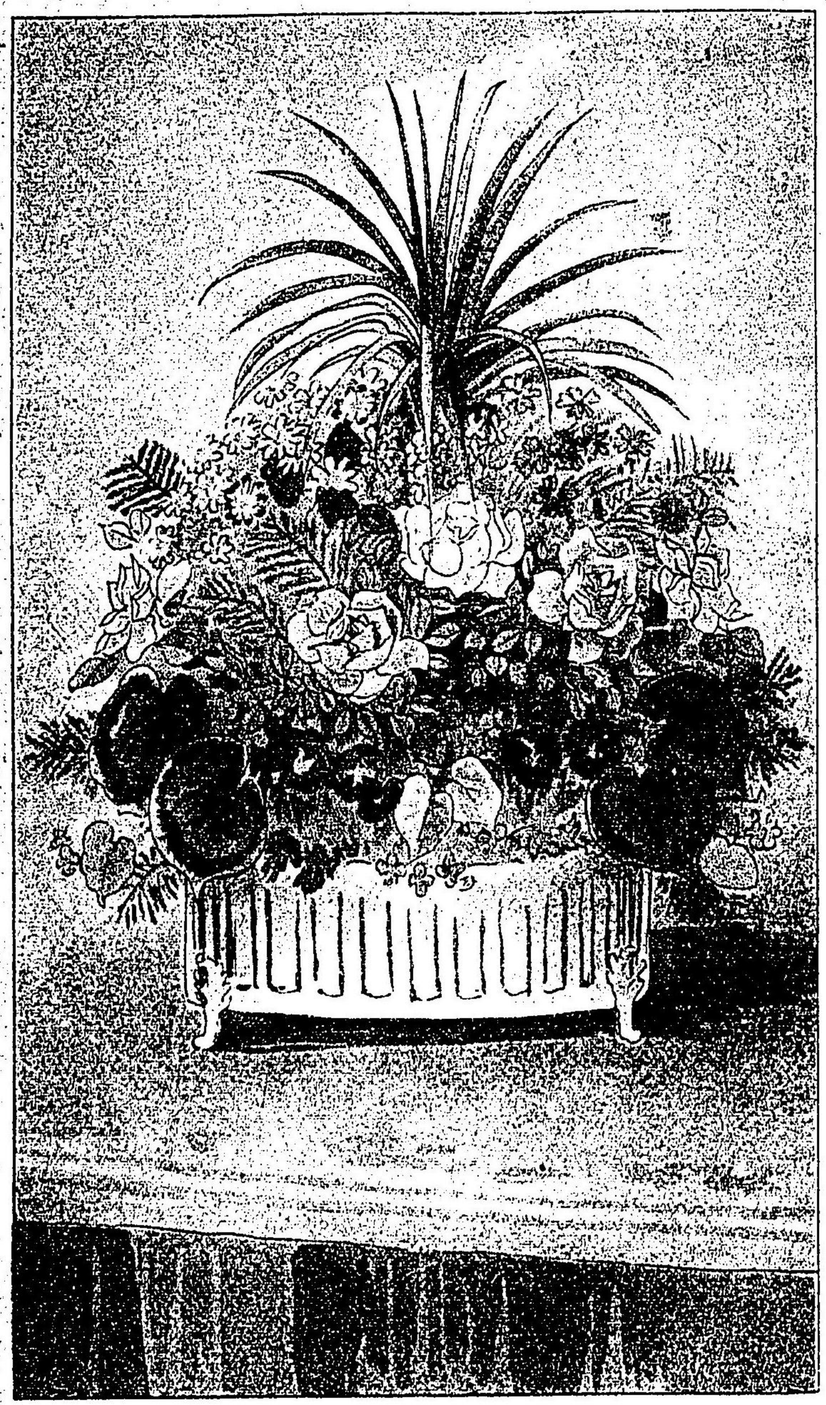
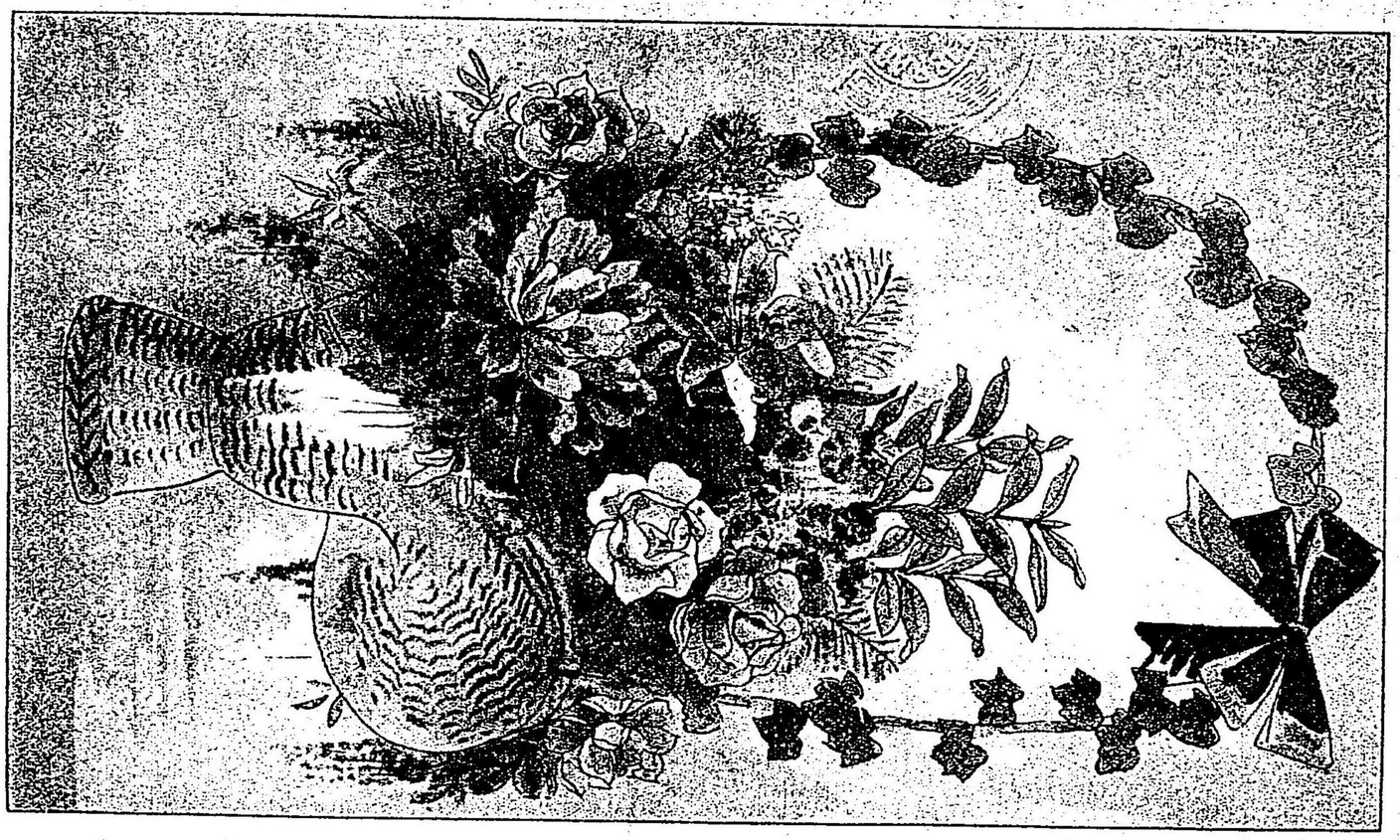
試花と贈苓

宮川紫外著

東京園藝株式會社出版部

明治
41 3 11
内交





緒言

歐米諸國に於て宴會の盛花、及其他の贈花に美を競ひて敢て費用を惜まざる風あるは、或る意味に於て實に國民の嗜好の高尚なるに基くものにして、美的觀念の發達せる現象に外ならざれば、予は之を贅澤視せざるのみならず、世界的美風として此の風習の普及せむことを望むものなり、

然れども人間の嗜好は、國土の風俗習慣に依りて差異あるものなれば、彼に良習ありといへども、之を強ふることは能はざるは言ふを待たざれども、斯の美風の如きは、實に我が國粋に消化せしめて、採長補短の研究を重

ぬべき技藝と思意せらるゝなり、幸に本邦現時の狀況は、已に此の傾向を顯しつゝあれば、將來益々此を發達せしめむことを期せざるべからず、

然るに本邦未た此の種の事を記載したる書あるを見ず、隨ひて盛花及送花の如何なるものなるかをすら、解するもの稀有なるが如く思はるゝを以て、今聊か實驗せし所、及見聞せし所の確實なる說明を採輯し、以て斯道に志す江湖の諸彥に便せんとす、讀者幸に予が微意を諒として、其の杜撰を咎むることなくんは、幸甚

編者誌

目次

盛花法

盛花に要する材料

(一)盛花器の事

(二)花卉及觀葉植物の事

(三)水苔、竹串、糸、筆、海綿の事

(四)鋏、霧吹器、竹筒、花入函、卓子の事

盛花の下拵の事

盛花の揷方の事

第一實例　第二實例　第三實例

第四實例　第五實例　第六實例

第七實例　第八實例　第九實例

第十實例

敷花法

敷花に要する材料

花卉類の事
敷花の敷方の事　第二實例　第三實例
第一實例
第四實例
卓上裝飾圖解

襟挿法

襟挿に要する材料
(一)花卉類の事
(二)細銅線の事
(三)鉛紙(通俗銀紙)の事
襟挿の挿方の事
(一)男子用襟挿の事
(二)女子用襟挿の事
第一實例　第二實例
大形實例

花籠法

花籠に要する材料
(一)花器の事
(二)花卉類の事
(三)チュール、リボン、水苔、竹串、糸の事
花籠の挿方の事
第一實例　第二實例　第三實例

花束法

花束に要する材料
(一)花束類の事
(二)臺紙の事
(三)線、鉛紙、リボンの事
花束の挿方の事
第一實例　第二實例

花輪法

花輪に要する材料
(一)花卉類及乾燥葉莖の事

(二)大小線の事
(三)水苔の事
花輪の拵方の事
第一實例　第二實例　第三實例
第四實例

目次をわり

盛花と贈花

宮川紫外

盛花法

盛花とは美しき花、麗はしき葉を以て其の彩色および配置を程よく一器中に蒐挿したるものを云ふのである、其の美は則ち自然美中の美、百美中の美とも云ふべきほどのものなれば、食卓上の中央に配置せられて、衆人の視線を引きつゝ、他の食品類と同様若くは夫れ以上の賞美を受けつゝあるのは偶然でない。

盛花は西洋挿花術中の主なるものであるが、本邦の夫れと異り、天地人とか眞行草とか云ふ、規則立ちたる一定の法はないが永き經驗

の結果、斯くするより斯くした方がよいと云ふ鑑別より出てたる仕方がある、此の不文の仕方が盛花の組立法であつて、此の組立法に依つて凡て盛花を爲すのである、左ればとて必ず斯くしなければならぬと云ふのではない、他に一層よき仕方あれば、適宜に夫れに依るも差支はないが、今は斯くした方が自然よいと云ふことになつて居る、先つ其の材料より述べ始めよう。

盛花に要する材料

偖食卓上の盛花を爲さんとするには、先づ如何なるものを要するかと云ふに左の諸品である。

一　盛花器
二　花卉類

三　水苔、竹串、糸、筆、海綿、
四　鋏、霧吹器、竹筒、花函、卓子

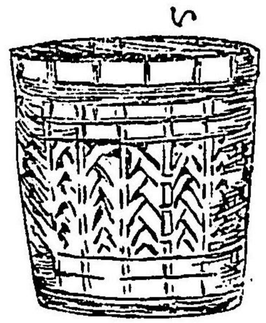
其他の器具を要する場合もあれども、是等は又代用も出來る途あれば此處には省略す。

一　盛花器の事

盛花器とは、盛花を爲す花器を謂ふのであつて、其形狀種々あり、即ち方形、長方形、圓形、楕圓形等其他種々の形狀を爲し、一々枚擧に遑ない位である、而して其の品質に於ても、金屬製にて金、銀、銅、錫、線、及木竹製又は玻璃製磁器製等其他種々である、今其の器物の大體を知らしめんが爲め形狀の種々なるもの二三を紹介せば左の如くである。

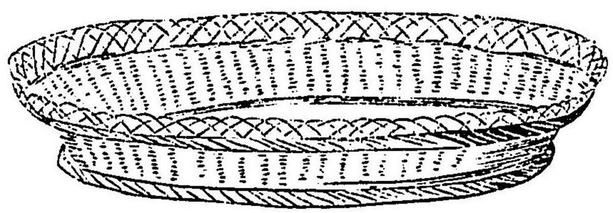
第一圖及第二圖とも割竹を編みたるものにて、即ち竹籠の類である、又藤にて製するもある、是等は無地にて使用するもあれども、亦金

（一）



（直徑八寸より一尺以内）

（二）



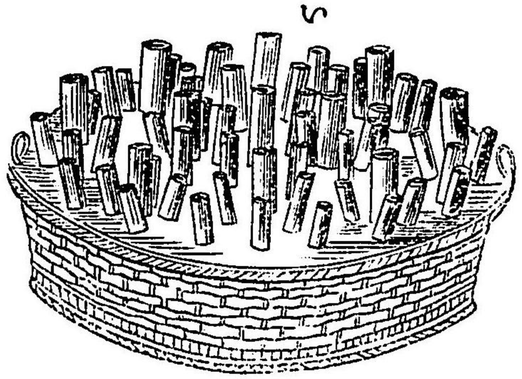
直徑一尺より一尺五寸以内

銀箔を塗り着けたるものあり。斯かる場合は多く藤にて製したるものを使用す。

（三）

直徑八寸より尺以内

（四）



直徑一尺より一尺五寸以内

第三圖及第四圖の大部分は割竹製又は藤製て、第四圖の小筒は何れ

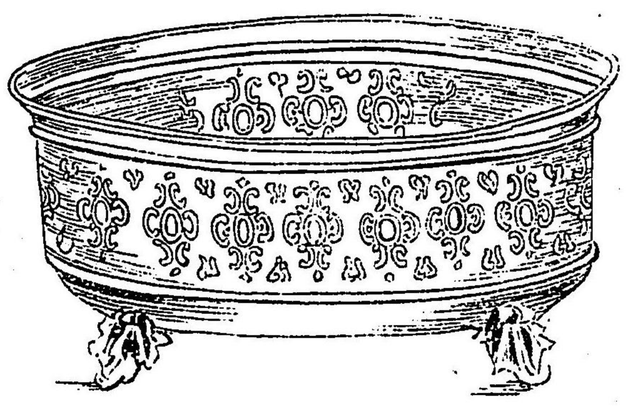
も亞鉛製、其の中座は板である、第三圖の分は金銀箔を塗るとあるが、第四圖は然らず、此の小筒へ水を入れ、花卉を夫れに挿すので、特異の盛花器である。

第五圖及第六圖は何れも金屬製にて、第五圖は亞鉛製にて第四圖と同樣、此の小筒、花卉を挿す、特異の盛

(五)

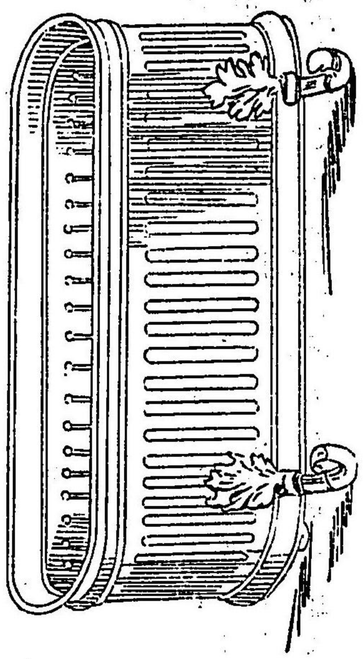
長サ尺五寸巾七寸

(六)

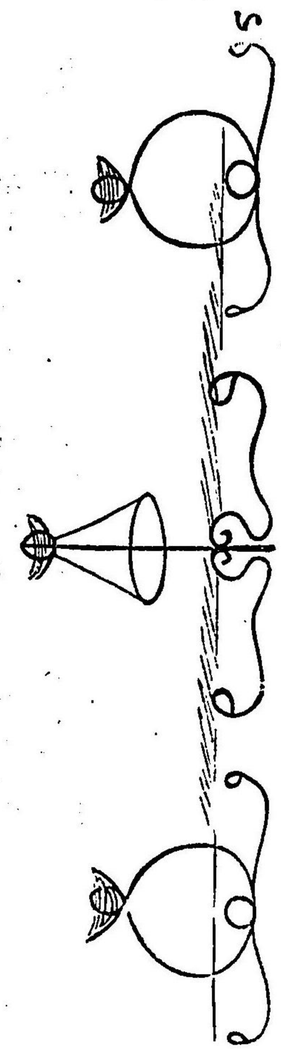


直徑二尺以内

(七)



(八)

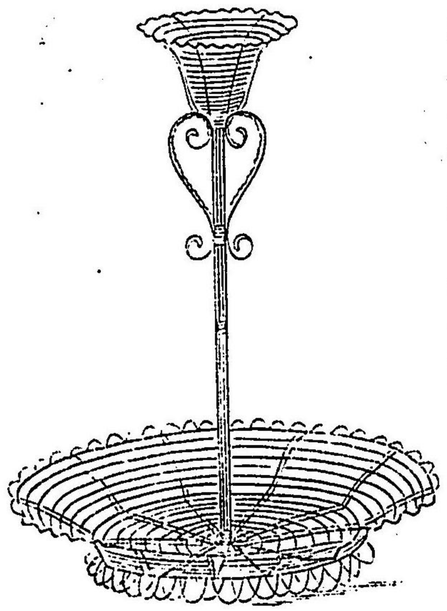


花器である、第六圖は唐金製なれども、時に陶器製のもある。

第七圖及第八圖は何れも金屬製であるが、第七圖は唐金製で、又陶器製の

もある、以上第七圖までは普通の盛花器であるが、第八圖は大宴會用の盛花器で多部分、線で製してある、高三尺以内。

（九）

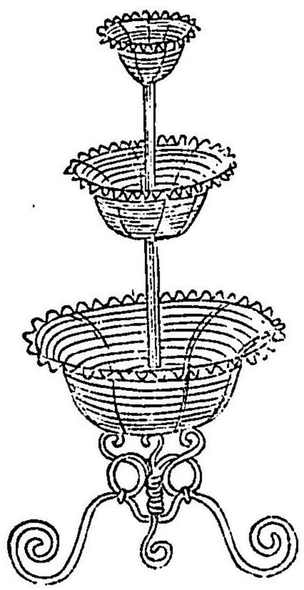


直徑二尺以内

高サ三尺以内

第九圖は殆と全部、線にて製したるものであつて、上部の凹所と下部の大凹所へ花卉を挿すのである、是は第八圖の夫れと同しく大宴會用に使ふのである形狀種々あれども是は本邦の燭臺形になりしものである、其他以下に示す第十圖の分の如きは三段盛にして此の分より一層大なりと知るべし。

（十）



直徑二尺以内

高サ三尺五寸以内

第十圖は第九圖同樣、全部大部分線製にて、三段とも花卉を挿す、全體に大きく、同しく大宴會用である。

以上盛花器は其の形狀、品質の種々ある內、僅に其の一部分を示せしに過ぎぬ、又適宜之を製造して使用するも差支なければ、其他適當のものを以て代用するも宜しい。

二　花卉類の事

花卉及觀葉植物は、是が盛花の主なるものであるから、能く其の撰擇を必要とする所であるが、さればとて、何の花は使用してはならぬと云ふものはない、僅に毒草の甚しきを遠慮すればよい位である、故に本邦の花卉類中、世人の最も愛翫する牡丹、芍藥、百合は言ふまでもなく、野に咲く蒲公英、紫雲英、又は菜の花までも使用して差支ないのである、殊に外國人向の盛花は、本邦在來の花卉を使用するが宜しき樣である、又本邦人向は、洋種の花卉を珍重せらるゝ樣であるから、盛花用の花卉類は、其の時々の客人に注意して、此の斟酌を爲す必要がある。

左に花卉類又は觀葉植物の最も多く盛花に使用せられつゝあるものを摘記し置くが、本邦在來の花卉類は讀者の已に承知せらるゝものの多ければ、茲には自然洋種の花卉に渉る。

花卉類

シネラリヤ各種

是は栽培の仕方によりて、一月頃より四五月頃まで採花せらる、花期の永きのみならず、單重瓣の兩種に花色種々なるあり、花形菊花形にして愛翫すべき强剛なる花卉である。

プリムラ各種

是は本邦の櫻草と同屬の花で、總て能く似て居る、是も栽培の仕方によりて、一月頃より四五月頃まで採花せらるゝ、花期の永きのみならず、種類種々あり、花色花容にも種々ありて、愛すべき花卉であるが、種類中オプコニカの一種類は、芳香を放

ちて一層の美を有つて居る。

フリヂヤ各種

是は本邦のシャガに似たる花で、筒咲の花を一花梗上三四個づゝ下方より順次上方へ開く、即ち上昇花序であつて、花色は僅に紅白の二種に過ぎないが、芳香殊に高く愛すべき花卉である、是も栽培の仕方によりて、一月頃より四五月頃まで、採花し得らるゝのである。

ジヤサント各種

是は本邦の水仙に似たる花で、一花梗上數十個の花を鈴の如く簇着せしめ、花色も紫紅白等種々あり、花容も重單瓣等ありて、其の愛すべきは迚も水仙などの及ぶ所ではない、且つ芳香を放ちて、一層の美を添へて居る、是も栽培の仕方によりて、一月

頃より四五月頃まで採花し得らるゝのである、之をヒヤシントの名稱を以て呼ぶものが多い。

チュリップ各種

是は本邦にて醋金香と云ひ蓮花の小なる花に似て、花色花容種々ある、薔薇形の實に麗艶なる花である、是も栽培の仕方によりて、二月頃より四五月頃まで採花し得らるゝのである、

アネモネ各種

是は重瓣の菊花形の最と麗はしき花で、花色も種々ある花卉である、是も栽培の仕方によつて、二月頃より五六月頃までも採花し得らるゝのである。

ヘリオトロップ

是は本邦の夢楊櫨の花に似て、小なる紫色の花を著けるが、芳

香の高くして美なる事、恐らく花香の王であらう、故に香油香水にヘリオトロップの名があるのである、是は栽培の仕方に依りては、四季採花するとを得らるゝので、實に重寶の花卉である。

スミレ各種

是は本邦の野生のスミレに似て居るが、栽培の結果得たので、花香も高く花容も大きく、性軟弱である、其の愛らしさと、芳香の馥郁たる、花の美なるとは、全く他花に見ざる所である、是は栽培の仕方によりて、十一月頃より翌年四五月頃まで採花し得らるゝのである。

パンシイ各種

是は本邦にて遊蝶花又は三色スミレとも云ふ、三色を一花中に

有するスミレの一種で、普通のスミレの花形の、夫れより大なるものである、是は培培の仕方に依り、十二月頃より翌年降霜時期まで採花すると出來るから、殆ど周年採花し得らるゝのである。

カルセオラリヤ各種

是は本邦にて巾着草と云ふ、其の花形全く巾着の如くなるからである、花色種々あり、其の愛らしさと他花に見ざる所である、是は栽培の仕方によりて、二月頃より五六月頃まで採花し得らるゝのである。

オレゼタ

是は本邦の欵冬の蕚の如き花容で、花としては餘り美しき方てはないが、芳香殊に高く、且つ盛花花束等には其の用途至て廣

い、是は栽培の仕方により、二月頃より五六月頃まで採花し得らるゝのである。

オリノンキユ各種

是は本邦の福壽草の花形の大なるものと言つてよい、花色花容とも種々あり、色澤殊に艶はしき花卉である、是は栽培の仕方に依り、二月頃より五六月頃まで採花せらるゝのである。

オイエー各種

是は本邦の撫子の種類であつて、カーネーションの名稱が廣く通用せられて居る、芳香殊に宜しきを以て麝香撫子の名もある、是は栽培の仕方によりて、一月より殆ど周年採花し得らるゝ重寶な花である。

ペチユニア各種

是は本邦にてツクバネアサガホと云ふ、單瓣の朝顔花形のものと同種である、單瓣種のものにも見るべきがあるが、重瓣種に至りては、實に美麗を極む、花色花容とも種々ある是は栽培の仕方に依り、四五月頃より降霜期まで採花し得らるゝのである。

ミユーゲー

是は本邦にて鈴蘭又は君影草とも云ふ、鐘狀の白花を花梗の先端に穗狀につける、其の狀愛すべく、又其の花香の馥郁たるは、一層此の花卉の價値を高くして居る、即今一般に流行する蓋し故なきにあらずである、是は栽培の仕方に依り、一月頃より四五月頃まで採花し得らるゝのである。

グログスニヤ各種

是は本邦の桔梗花形の稍、大なる種々の花色を有する花であつて、

且其の艶美なるは此の花の特色とする處である、是は栽培の仕方に依り、三月頃より八九月頃まで採花し得らるゝものである。

シクラメン各種

是は本邦にて豚の饅頭と云ふ、花形は飛燕の如き一種畸形の狀を爲し、花色花容とも種々ありて、實に愛らしき花卉である、豚の饅頭と云ふ名稱は、此の植物の球根か其の形狀に類せしに依るものであると云ふ、是は栽培の仕方に依りて、二月頃より五月頃まで採花し得らるゝものである。

ホクシヤ各種

是は本邦の石榴の花に似、花色花容とも種々ある愛らしく且つ美しき花卉である、是は栽培の仕方に依り、四月頃より六月頃まで採花し得らるゝものである。

アマリリス各種

是は本邦にて馬鈴薯水仙と云ふ、葉根は水仙の大なるものの如く、花は百合の如く、花色二三種ありて、最も壯麗の花である、是は栽培の仕方に依りて、三月頃より七月頃まで採花し得らるゝものである。

アクイレジア各種

是は本邦にて樓斗菜と云ふ、花色種々あり、殊に花容の面白きを以て、一層其の花の美を添ふ、是は栽培の仕方に依りて、二月頃より六月頃まで採花し得らるゝものである。

スイトピー各種

是は本邦にて麝香連理草と云ふ、豌豆花に似て一層美なるものである、其の花色の種々なること、又花形の大なること豌豆花

と同日の話にあらざるは勿論、殊に芳香の馥郁たる、花色の艶美なる、新種の續出するを以て、即今流行の花卉に屬して居る、是は栽培の仕方により、二月頃より九月頃まで採花し得らるゝので花期の永き花に屬して居る。

ダリヤ各種

是は本邦にて天笠壯丹と云ひ、早くより舶來種ありたれども、何れも種類の劣等のもののみであつたが、近頃新良種出來し、花色に於て其の艶美なるもの、又花容に於て冬咲種の如き美なるものの出て、殊に花期の永きを以て流行花の一に數られて居るのである、是は栽培の仕方に依り、三月頃より降霜期まで採花を繼續する事の出來るものである。

カンナ各種

是は本邦にてダンドクの名稱能く通して居る、又美人蕉とも云つて居る、花菖蒲形の花を、花梗の下部より、上昇に開花して、花期永く、花色種々ある、花卉である。是は栽培の仕方により、三月頃より降霜期まで採花し得らるゝのである。

グラジオラス各種

是は本邦にて唐菖蒲と云ふ、花菖蒲に似たる所が多いので此名があるので其の總ての形態は推察が出來る、花色種々ありて花期も永く、三月頃より七八月頃まで、採花し得らるゝのである。

ロベリヤ各種

是は唇形花の小なる花を着ける可憐の花卉である、花色種々あり花期も短からず、殊に栽培の仕方に依つては、四月頃より十月頃までも採花し得らるゝのである。

リラ各種

是は本邦にてハシドイと云ふ、種藝の結果にて得たる良種にて、花色に紫白の二種あり、花形も大く、芳香も一層高く、實に愛すべき、花卉である、是は栽培の仕方に依り、二月頃より、六七月頃まで採花し得らるゝのである。

バーベナ各種

是は本邦にて美女櫻と云ふ、花形櫻に似て愛らしく、殊に花色種々ありて、實に艶美なる花卉である、是は栽培の仕方に依て、二月頃より殆ど周年採花せしむる事を得る花卉である。

マルゴールド各種

是は本邦にて萬壽菊と云ふ、小なる菊花形の花であつて、花色種々あり、花期も永く可憐の花卉である、栽培の仕方に依りては、殆ど春夏秋の三季採花し得らるゝのである。

ブバルヂヤ

是は本邦の迎春花形の花にして、即ち高盆狀の白花を着くるものである、花香馥郁として其の美なること他に見ざる花卉である、是は栽培の仕方により、七月頃より十二月頃まで採花し得らるゝのである。

コスモス各種

是は單瓣の菊花形で、花色種々なる美花を着ける、種類も種々あるが、栽培の仕方に依りて、五月頃より降霜期まで採花し得らるゝのである。

ゲシネリヤ各種

是は鐘狀形の花で、花色種々ある、栽培の仕方によりて、五月

頃より八月頃まで採花し得らるゝのである。

ヒビスカス各種

是は本邦にて芙蓉と云ふ槿の一種にして、花色花容とも種々ある、栽培の仕方に依り、五月頃より十月頃まで採花する事を得らるゝのである。

ベコニヤ各種

是は本邦にて秋海棠と云ふのと同種屬のもので、種類甚だ多い花色の美なるあり、葉色の美なるあり、其の用途も兩樣なるが、ベゴニヤ レックスと云ふ種類の葉色の美なるは、實に他に見ざる所であつて、觀葉植物中にも屈指のものである、是は栽培の仕方によりて、二月頃より殆ど周年採花するとが出來る、又觀葉用の分は無論周年採收する事を得らるゝのである。

ベゴニヤの種類は殊に多く、何れも垂下狀を有して居るから、盛花の周圍下部の方へ、其の花を必要とすると同時に、觀葉種の葉も、亦周圍の下部に必要である。

コーンフラワー各種

是は本邦にて矢車草と云ふ、花形矢車狀であるから、此の名を付けたものと云ふ、花色種々あり、丈夫なる花卉である、是は栽培の仕方により、三月頃より十一月頃まで採花を繼續するとが出來るのである。

カンパヌール各種

是は鐘狀形の花を葉腋に着け、花色も種々ありて、愛すべき花卉である、是は栽培の仕方に依り、三月頃より七八月頃まで採花し得らるゝものである。

ラークスパー各種

是は本邦にて千鳥草又は飛燕草と云ふ、其の花形が鳥の飛び居る形をして居るから、此の名稱あるので、名によりて花形の推測が出來る、花色も種々ある、丈夫なる花卉である、是は栽培の仕方に依りて、三月頃より十月頃まで採花し得らるゝものである。

カレンジユラ各種

是は本邦にて金盞草と云ふ、重に黃色の菊花形の花を着く、栽培の仕方により、三月頃より十月頃まで採花するとか出來る。

ポツピー各種

是は本邦にて虞美人草と云ふ、罌粟の一種で花色の種々なる、且光澤の艶美なる事、他花に見さる所である、是は栽培の仕方

に依り、三四月頃より九月頃まで採花し得らるゝのである。

チグリヂア各種

是は美人蕉に似たる花卉で、花色も種々ありて、愛すべき花卉である、是は栽培の仕方によりて、二月頃より六月頃まで採花する事を得らるゝのである。

ゼラニユーム各種

是は本邦にて天竺葵と云ふ、花色種々ありて美しき花を着ける、栽培の仕方に依りて、五月頃より九月頃まで採花し得らるゝのである。

メヨゾチユース各種

是は總狀に小なる可憐の花を着け、殊に一の故事ありて賞翫せらる、是は栽培の仕方により、三月頃より六月頃まで採花せら

るゝのである。

サルビヤ各種

是は本邦の紫蘇の花形に似て、穂狀に無限上昇の花を開く、花色種々あり、色澤殊に艶美にして、最と愛らしき花卉である、是は栽培の仕方に依り、三月頃より降霜期まで永期間採花し得らるゝものである。

ポインセチヤ各種

是は本邦にて猩々木と云ふ、高出葉か花形の如くなりて紅變する、美しき植物である、是は栽培の仕方に依り、十一月頃より翌年二月頃まで採花せらるゝものである。

アラセイトウ各種

是は十字花形で單瓣種と重瓣種とある、花色も種々あり、花期

永きを以て栽培の仕方により、三月頃より十月頃まで採花せらるゝものである。

ミムリヨース各種

是は猿の面に似たる花て、其の花形を賞せらる、又花色も種々あり愛すべき花卉である、是は栽培の仕方に依り、三月頃より七月頃まて採花する事を得らるゝのである。

フロツクス各種

是は本邦の迎春花形の花を梗上に群簇せしめ、殊に花色種々ありて、一層の美を爲す、長莖種と短矮なる種類とありて花期が長い、栽培の仕方によりては、三月頃より十月頃まて採花することを得るものである。

シクシヤ

是は本邦の茗荷に似て、花亦茗荷の子と殆と同樣である、只たの茗荷は、根元に茗荷の子、即ち花を出すが、此のシクシャは莖の頂端に茗荷の子形て白色にして芳香ある花を出す、栽培の仕方により、九月頃より翌年一月頃まて採花し得らるゝものてある。

ブーゲンベラサンドリアナ各種

是は小なる鐘狀形の花を枝端に着け、其の下邊の高出葉が紅變して花瓣狀を爲す、珍奇なる花卉てある、花色紅白あり、是は栽培の仕方により、十一月頃より翌年二月頃まて採花し得らるゝのてある。

ユウチヤリス各種

是は合瓣なる高盆形の白色なる花て、其の純白にして高雅なる

と他に見ざる所てある、一花梗の頂端に二三個づゝ花を注ける百合の或る類に斯の如きものがある、是は栽培の仕方に依り、七月頃より開花し始め翌年二三月頃まて繼續せしむるとも得るのてある。

アンチリューム各種

是は本邦芋の花の形に似て肉穗花を爲し、瓣は一にして紅白の二あり、其の畸形他花に見ざる所てある、是は九月頃より翌年一二月まて採花するとを得らるゝのてある。

イソレビュース

是は本邦の菡の極小なるものと同じ樣のもので、其の靑々たる葉色を愛翫するのてある、盛花には三四十本つゝ一托して竹串の足を接け、垂下狀に使用するのてある。

薔薇各種

是は盛花始め、其他裝飾用に於て、最も必要とする所であつて、殊に種類も益々增殖し、花色花容等も種々ありて、益々其の愛翫の度を高め居る、是は栽培の仕方に依り、二月頃より殆と周年採花する事を得らるゝのである。

百合各種

是も盛花始め、其他裝飾用に薔薇に亞て必要とする所である、栽培の仕方に依り、二月頃より七月頃まで採花し得らるゝものである。

躑躅各種

是も盛花其他に必要とする所であるが、殊に花の欠乏せる冬期採花せらるゝので、一層其の需用の度を高め居る、是は栽培の

仕方に依り、一月頃より五月頃まで採花し得らるゝのである。

コリウース各種

是は觀葉植物であつて、其の葉色の美なるを賞翫す、一見紫蘇の葉莖の如きと、唐菖蒲の如きとあり、葉面種々の色素を顯はし、花よりも美なるものある、是は栽培の仕方に依り、殆ど周年採收することを得らるゝのである。

ドラセナ各種

是は觀葉植物であつて、本邦の馬耳蘭形の葉を有するのと、然らざるのとある、葉面紅白の班入等ありて、美觀を呈す、是は周年使用する事を得らるゝのである。

クロートン各種

是は觀葉植物中最も美なるものであつて、其の葉形に針形、線

形、披針形、篦形、楔形、楕圓形等の種々あるか上に、葉面に種々の色素を顯はし、光澤殊に艶美にして、觀葉植物中一二位を占むるものである、是は周年採收するとを得るものである。

アスペラグス各種

是は葉が針形の柔軟なる細葉であつて、プリモサと云ふ種類の如きに至りては、其優美なると實に他に見ざる所である、是は周年採收する事を得る。

アジアンタム各種

是は本邦にて箱根羊齒と同種屬のものであるが、栽培の結果夫れ以上の良種のもののみある、此の羊齒の葉色の美なると新綠の滴るが如く、其の翠色盛花として欠くべからざる程のものである、是は栽培の仕方に依りて周年採收するとを得らるゝのである。

スミラツクス

是は蔓性の觀葉植物であつて、直脉の腎臟形の小葉を着く、其の葉面の光澤艶美であつて、實に愛すべき可憐の蔓草である、是は栽培の仕方に依り、殆ど周年採收することを得らるゝのである。

ナスターチユム各種

是は蔓性植物で其の葉形楯の形に似て、花は兜に似たるより、戰勝の紀念植物として賞翫せられて居る、是は栽培の仕方に依りて、五六月頃より降霜期まで採收せるゝのであるが、觀葉の目的で蔓物として採收する時は何時にても宜し。

カラジユーム各種

是は本邦の里芋葉形葉を有する觀葉植物であつて、其の葉面に種々なる班點を有するを以て愛翫せらる、是は栽培の仕方に依りて、一二月頃より五六月頃まで採收し得らるゝのである。

フアレノプシス各種

是は蘭科植物中最も上位を占め居るものゝ中にて、本邦にて胡蝶蘭と云ふ、花形蝶に似たるに依るならん、花梗上種類に依り白色と桃色との花を着く、其の數一花梗に十數個を着くるを常とす、花容實に愛すべきである、栽培宜しきを得ば、十二月頃より翌春三月頃まで採花し得らるゝのである。

セロジーネ各種

是は一般に塊莖を有する蘭科植物であつて、本邦在來の蘭花形の花を着く、但し花梗は種類により分岐するあり、又分岐せざ

るもある、採花は種類により殆ど周年に至る。

カトレヤ各種

是は蘭科植物中の王と云ふべきであつて、其の花容と云ひ、花色と云ひ、全く實に花王たるに耻ぢぬ、種類によりて種々あれども、一般に白に旗瓣の下部と龍骨瓣の大部分が薄く、桃色又は紫色を呈して居るのが多い、栽培宜しきを得ば、殆ど周年採花し得らるゝのである。

シプリペヂユーム各種

是は本邦の熊谷草花形にして袋狀を爲す、花梗上一輪を着くるあり、又數花を着くるもあり、種類も花色も種々ある。蘭科植物中上位を占むるもので、栽培宜しきを得ば、殆ど周年採花し得らるゝのである

デンドロビューム各種

是は本邦の石斛の種類にして花形同じ、種類殊に多し、栽培宜しきを得ば、殆ど周年採花し得らるゝのである。

バンダー各種

是は本邦の石斛の同種屬で、花形殆ど同じ、種類亦多し、栽培宜しきを得ば、四月頃より周年採花し得らるゝのである。

オンシデイム各種

是は花形蝶の形を爲し、即ち胡蝶蘭に似て一層小く、又花數多く花梗分岐亞叉を爲して數十花を着く、花色も種々あり、愛らしき蘭花である、栽培宜しきを得ば、殆ど周年採花し得らるゝのである。

シンビヂューム各種

是は本邦の建蘭類の同種屬であつて、花梗より花形等に至るまで始ど同じである、採花は四月頃より六月頃の間である。

ヒムロ

是は檜松楊の枝先を盛花の下草に使用するので、周年之を採收するのである。

ヒバ

是は椹の枝先を盛花の下草に使用するので、周年之を採收するのである。

右花卉類中栽培の仕方に依り、周年採花せらる云々とあるは、人工溫度を以て促成を爲し、又怠延栽培によりて遲からしめ、又種々なる早中晩の種類を利用して、採花期を永からしむるのを云ふので、僅に一種類にて爲す事を云ふのではない、又花卉類は此外、洋種日

本種とも澤山あれば、茲に枚擧に遑なきを以て擧げざれども、何れも使用して差支なきのみならず、又茲に掲けたるものを一も使用せずして、其の他のもののみにて使用するも、差支ないのである。

三水苔　竹串　糸筆　海綿の事

水苔――とは水中に生したる苔を、乾燥したるものであるが、是は含水のよきものであるから、之を水に浸し、適度に絞り置く時は、永く水分を有ちて居て、植物の荷造りなどする時、其の根部を包み置く時は、至極適當のものであるから、古來其の用に供し來たりしものであるが、盛花に使用するにも、水分を保給せしむる爲め、花卉の切口に纏付せしめたり、又盛花器中に詰め込みて、盛花全體に水分を保給せしむる用に供するのである、其の他此の樣の用途に使

用するのである、例せば花函内へ敷きて花卉類の乾燥を防く等多々あり。

竹串――とは長さ四五寸位の太さ壹分以内の丁度、團子の串位のを謂ふのて、其の用途は花卉類を盛花器に挿す時に花卉類の足にするので、其の仕方は後に述ふるけれども、花卉類に接ぎて盛花器に挿さるゝ足となるものである事を承知して置かれたいのである。

糸――は何の種類に限らないが、木綿糸にて宜い、是は花卉類に竹串を接ぎて之を縛る時に用ゐたり、又水苔を盛花器の形に縛りて、其中へ入るゝ時、等其他にも使用するのてある、是は作業上に便利ならしむる爲豫て小なる糸卷に卷き直し置く事肝要である。

筆――筆には限らず小なる筆形なる刷毛にても宜い、是は花卉の掃除用に使用するのてあるから、通常の筆より毛の剛きものて丈夫

に製したるものか適當なれども、普通の水筆の毛の剛き樣の分を撰び代用せしむるも差支ないのである。

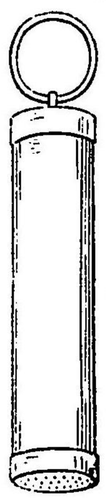
海綿――は普通の海綿にて掃除用にするのであるから、其の積りにて可成柔きものを撰ふが宜い、クロートン其他上種の觀葉植物になると、是非是にて一應掃除しなければ盛花の用に供せられざるゆゑ、是が備付けを要するのである。

四　鋏　霧吹器　竹筒、花函　卓子の事

鋏――は普通の花鋏にて宜し、總べて樹枝又は竹串などを截るのであるから、新式の分でも舊式の分でも何れも、花卉類の十分截れるものであれば宜い。

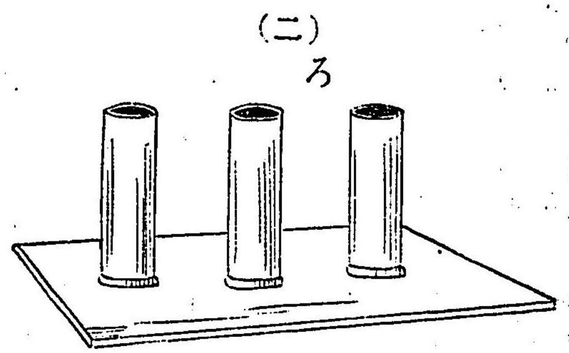
霧吹器――花卉を盛り上げてから霧吹器にて細霧を吹きかけ置くのであるから、可成輕便なる且持運びにも容易なるものが宜い、霧吹器は花卉類と同しく先方へ持込みて使用するものゆゑ、輕便と堅牢とを主とするのである、種々の霧吹器あれども、實用向であつて價格も高からず、且堅牢なるは眞鍮又銅製の左圖の如きもの適當である。

（一）ろ

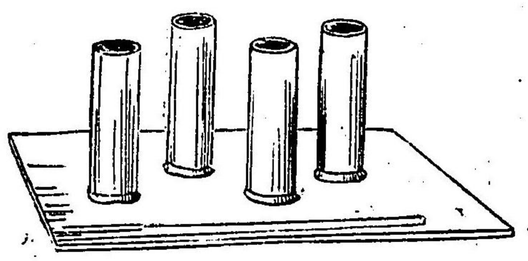


竹筒――は是に水を盛り、花卉を假りに挿し置きて、盛花の下拵を爲す時に使用するものである、故に竹筒の据はりを能くする爲め、厚き板の臺の上へ二個乃至四五個づゝ付着せしめ、即ち圖の如く長方形の板に付着せしむるか作業上便利である、且作業上の都合より、

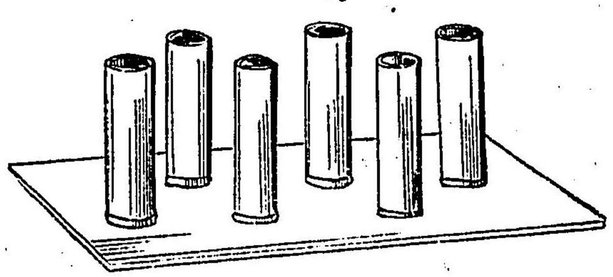
少數の二個位付着せしめたのも、又四五個乃至其れ以上の數を付着せしめたのも入用であるから、兩方準備し置く方が便利である、而



（二）ろ



（三）ろ

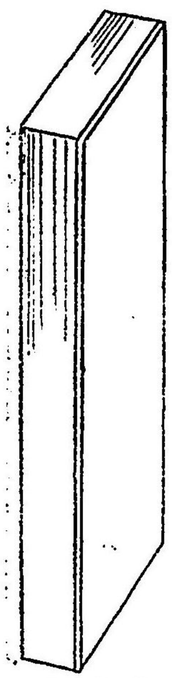


（四）ろ

して竹筒の長さは適宜であるが、節を最下端に付けて、上を上の節下にて截る時は、竹によりて節間の長短はあれども、大概此の竹筒の花挿として、適用せらるゝものとなるのであるが、出來得べくんば、可成節間の長きを撰びて、造るを便とするのである、尤も是は必ず竹筒に限るにはあらざれども、價格廉にして且輕便であるからである。

花函――は花卉を一時入れ置く場合に使用するので、必ず蓋付の分を宜とす、大さは持運びに便なる樣に、且つ花卉の都合上より左圖の如きを便とす。

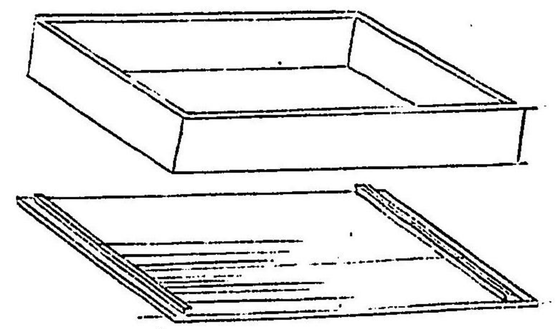
（五）ろ



長サ三尺
巾　一尺二寸
深サ七寸

是は必ず圖の通りならねばならぬと云ふのではないが、是迄使用せしものに依り圖の如き寸法のものを便とす。

（六）ろ



長サ二尺
巾サ一尺五寸
深サ三寸

卓子――は普通の卓子と云ふのであるが、是は盛花の下拵を爲す時、此の上にて爲すゆゑ、卓子は幅の廣き程が便利であれども、強ち如何程の大さてなくてはならぬと云ふのではない、夫れのみならず、必ず卓子でなくてはならぬと云ふのでもない、夫れ相當の臺になるものあれば、夫れにても代用が出來るのであるが、卓子なれば最も便とする所である。

以上水苔以下卓子に至る附屬品の外、尙手桶柄杓等の如き、又運搬用に要する器具即ち台輪とか、釣臺とか要する事もあれども、是等は直接の用品にあらざるのみならず、又他に代用の出來るものなれば茲には省略して置く。

盛花下拵の事

前項に於て、盛花に要する花卉及器具等の事を述へ終りたれは、是より盛花の下拵に及ぼう。

盛花を爲すには、先つ前記の盛花器中適宜之を撰定し、其の器物に應して花卉類の種類、及其の數量を算定しなければならぬから、先つ第一に盛花器を撰定するが先務である、盛花器の撰定が終れば、其の盛花器に要する花卉類の數量の概算をしなければならぬ、又花卉類の種類即ち西洋人向きか、本邦人向きか、此の注意も必要である。

此等の概算は、最初より爲し得らるゝものでないが、二三回も實地に盛花を爲す時は、凡そ此の大さの器物には、何程又此の小なる器物には、何程の花卉にて足れりと云ふ概略の算定は、出來得るものである。

盛花器が定まり、夫れに要する花卉類の種類及數量の概算も出來れば、其の花卉類を蒐集しなければならぬ。

そこで花園を有する人は、之を自分の花園より截採蒐集するのであるが、花園を有さない人は、勿論他の花屋より購入しなければならぬ、兎に角自園より採集するにも、亦他より購入するにもせよ、其の何れに拘らず、概算だけの花卉類が、此處に蒐集せられたとすれば、此度は之を適宜の寸法即ち花卉類の種類により、或は短く或は長く、一々之を截り分るのである、是は花園より截採りしものも、花屋より買集めたるものも、何れも其儘使用の出來る樣に。種類に依りて長短を見斗り截り分けてないから、ドーしても截直しをしなければならぬ、例へは大なる枝のものなら、之を幾箇にも截り分けるとか、又余りに長き枝莖のものなら、之を短くするとか、大凡其

の寸法を見斗つて、之を截り直すのである、此の見斗を以て截直をする事は、少しく熟練を要する事で、可成再度截直をする樣な手數のなき樣にしなければならぬ、是は以下述ふる所に依りて、其の寸法を加減すれば、大凡の所は略ぼ推測が出來やうと思はる、併し詳細の事は到底解説が出來ないが、即ち同一のものでも、長く截る時と、短く截る時とあり、又ベコニヤレックスの如く、葉を一枚つゝにして使用するものは、僅に葉柄を付して截り、アジアンタムの如きは是が反對で、葉柄を可成長く付して截るが如きであるから、是は後段に其の實例を示す、其の例に依りて、斟酌加減するより外ない、而して一二回實地に之を行ふ時は、大に其の手加減、即ち此の花卉は何程の長さに、此の葉柄は何程の寸法に截るがよいと云ふ事が、了解せらるゝのである。

適宜の寸法に截直しを行ふた花卉類は、其の使用高の概算をたて、此の花器なれば何程と、例へは長さ一尺巾八寸位の盛花器なれば、七八十本から百本餘りを要する勘定を以て、其の割合で概算をたてゝ、截り直しを行はねばならぬ、されば此の花は、何十本位を要するから、豫備として少しく多く、何十本截り置くとか、又此の葉ものは幾十個位を要するから、幾本多く截り置くとか、しなければドしても毀損が出來て數に不足を生し易いから、少しく餘分にして置くが宜い。

如上の加減を斟酌して、盛花用の花卉類が截り直されたれば、假に之を花函に入れ置き、一つづゝ之を掃除しなければならぬ。

此の截り直したる花卉類を掃除すると云ふのは、即ち虫類の有無を檢して、付着せるものは之を驅除し、又汚斑等の有無を檢して、汚

れたるものは之を洗ひ、又は拭ひ落すのである、此の虫類の驅除と云ふ事は、最も注意を要する事であつて、若し是が驅除を油斷して、虫類の殘り居るものある時は、後ち是が食卓上に這出つる事などありて、意外の失躰を招くことあるから、能く花瓣中から葉裏等を檢して、十分驅除しなければならぬ、又汚れたる花又は葉は能く掃除しなければならぬ、何れも筆又は海綿を使用し、要は花卉類をして清淨ならしむるのである。

截り直したる花卉類は如斯虫類の有無を檢し、又汚斑等を取除き、可成少しの間でも早く吸水せしむるが宜いから、豫め準備し置きたる竹筒の水を盛りたるものに挿し置くのである、又短くして竹筒に挿せない樣のものは、水笞を水に浸して、輕く絞りたるものを花函に布き入れ、其の上に載せて置けば宜い、是が出來たれば此の花卉類に竹串を足として接ぐ事をしなければならぬ。

花卉類に竹串を足として接ぐ作業は、是れ亦花卉を截り直す作業と同樣、注意と熟練とを要する業である。

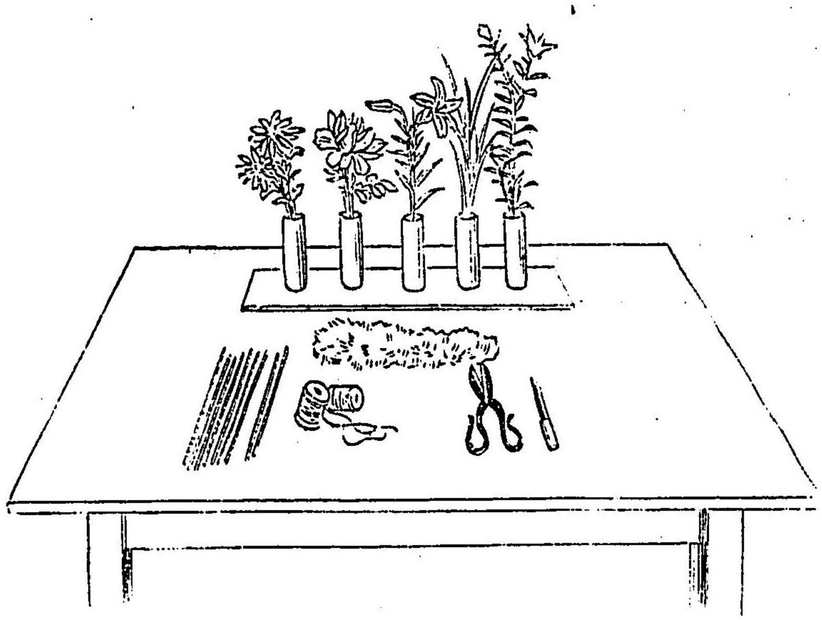
此の作業を爲すには、先づ卓子を併べ、其の上に竹筒に挿したる花卉類、又は竹筒に挿せないで花函中にあるものを載せ、夫れから水苔の水に浸して輕く絞りたるもの、又竹串と木綿糸とを載せ置きて、四方より多人類にて一時に之を爲すのである、尤も余り多からざる花卉の時は一人乃至二人にて之を爲すも差支ない。

卓子上へ配列するには、中央に花卉を挿したる竹筒を置き、水苔と竹串と糸とは其の前に置くが作業上便利である、今圖にて示す時は左の如し。

圖の如く花卉類に竹串を接ぐ、總ての用具が卓子上に連ばれ、作業

（七）

ろ



の準備が出來れば、愈々作業に着手するのである。此の花卉類に竹串の足を接ぐのは、花卉類を盛花器に挿すに、此の竹串を盛花器中の水苔に挿入して、上の花卉類が此の竹串の爲に動かぬ樣にするのであるから、花卉と竹串の接き目も、可成堅く動かぬ樣にするを肝要

である。

併し花卉類に、直ぐに竹串を接いで仕舞ふのは、作業が容易であるけれども、花卉類に水分を補給する道がなくては、凋衰して仕舞ふから、花卉類の切口をは、水苔の濡れたるものにて包み、其處へ竹串をあてて、三ッを一所に木綿糸にて縛るのである、即ち花卉類の切口の處と、水苔と竹串と、此の三つを一所にして縛ばるのである。之を爲すには、先づ水苔を其の花卉類の切口を包む丈け少ばかりを採り、左の手の指先に置き、右の手にて花卉を持ち、其の切口へ左の手にて其の儘あて、少しく切口を包む樣にして、花卉と一所に左の手に持ち、右の手にて竹串を採りて其處へあて、花卉と水苔と竹串と一所にして縛ばりつくるのである。

さて竹串を花卉類に接ぎて縛ばるのは、夫れて宜いが、必ず花卉類

一本に、竹串一本と云ふものでなく、二三本乃至四五本も一纏めに、一本の竹串を接くものあり、又一本の花卉に、二三本の竹串を足に接くものもありて、種々あれば、此の見計ひも亦肝要である。

此の見計ひも、花卉類の如何によりて、する事であるから、其の解説を爲す事も亦困難であるが、例へばバラの如きは一本の花に一本の竹串を接き、ジャサント(ヒヤシント)の如きもので、花の多きものは一本に一本の竹串を接ぎて宜いか、同しジャサントの花でも、一花梗に餘り澤山花の着かないもの等は、二本乃至三本の花を一纏にして、一本の竹串を接くのである、又スミレの如き小なる花は、二三本乃至四五本を一纏に、一竹串を接くのである、又シヂラリヤの如き、花でも花數の多く群着して居るものは、一本の花に竹串一本を接ぎても宜いが、花數の少い枝、又は小い枝などは、二三本を

一纏めにしなければならぬと云ふ樣な譯である、又アマリリスの如き大なる花になると、一本の花に一本の竹串では支へられぬから、二本の竹串を足として、兩方に接くるのである、是は重に眞として使用する花にのみ、多く行ふもので、餘り澤山に數多くする事ではないのである。

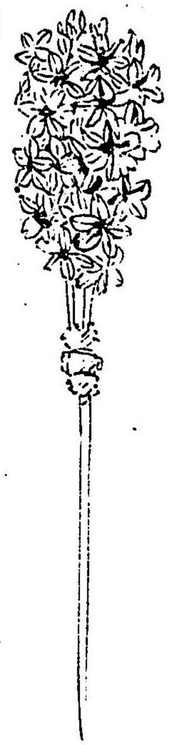
左に花卉類に、水苔と竹串と一所に縛りたる、如上の種々の事實を圖に示さば左の如くなる、之を標準として斟酌加減せらるれば、略ぼ推測し得らるゝならん、

(一)は

第一圖はジャサント(ヒヤシント)と云ふ、花卉の處にて略説せし花で、

其の長さは、花と下の竹串との長さを入れて、七寸位の心持である、而して是は比較的に花數が、澤山つき居る分て、夫れて一花梗に、竹串の足を、一本接けてある圖である、上の方が花で、其の下花梗と、竹串の間に、付着し居るものが、水苔である、是で花と水苔と竹串とを木綿糸にて縛ばり、花と竹串とを接ぎたる事も、分るであらう、以下一々是等の事は說明を省く事とする。

（二）は



第二圖は同じくジャサント（ヒヤシント）なれども、是は比較的花數が少かりし爲め、二本を一所にして、一本の竹串の足を接けたのである。第一圖のシャサントは一本即ち一花梗に着花も多いから、竹串

の足も一本接けたれども、此の分は同じジャサントでも、一花梗に着花が少いから、一本の花に竹串の足一本接けてはみそぼらしくて用ゐ難いから、花を二本寄せて一本の竹串を接けたのである。

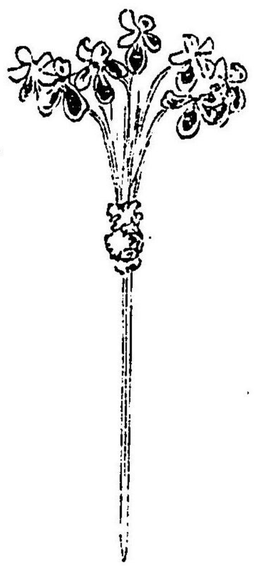
說明中に同一の花でも、其の花の如何によりては、一本の花に一本の竹串を接けるもあれば、二本の花に一本の竹串を接けるもありと、記し置きたる實例は、即ち是て了解せらるゝならん、如斯理由に依て其の區別をたつるのてある事を記憶せられたし。

此の花卉の寸法は、第一圖にて推察が出來樣と思はるゝなれども、序に記し置く、是も花と竹串とを合せて其の長さ七寸位と見て差支ないのでである。

第三圖はスミレ（バイオレット）の花、五本を寄せて、一本の竹串の足を接けたのである、此花が小いから、一本の花に一本の竹串では、

る。

（三）は

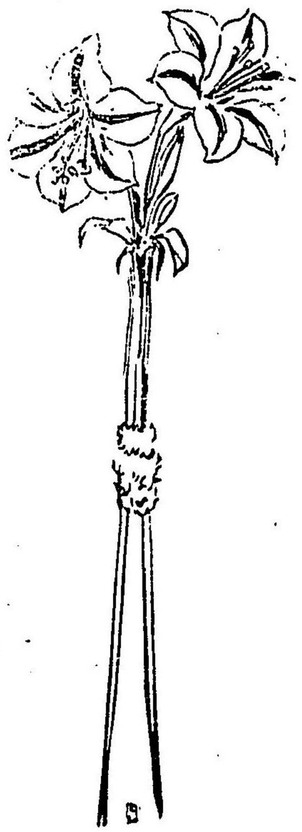


説明中に小なる花は、四五本を寄せて、一纏めとして、一本の竹串の足を接くる樣にしなければならぬと云ふ事がある、是は其の能き實例を示したもので、此の實例によりて、此の理を應用し、他の同一の事實を斟酌あらまほし、此の花卉の寸法は、花と竹串とを合せし、六寸位のものである、スミレを採收する時は如斯花梗を長く付して截り取ると肝要である。

第四圖はアマリリス（ジヤガタラスイセン）と云ふ、百合花形の百合よ

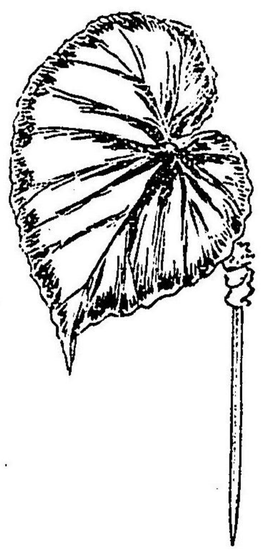
り大なる花にして、一花梗に二輪位を着くるものである、從ひて花梗も太いゆえ、是等には一本の竹串の足を接けても支へ難いから、二本乃至三本を接けるのである、是は二本の竹串を接けたる圖である、此の花卉の總丈けは花の頂きより竹串の先端までにて、一尺四五寸もあるのである、此の花は重に盛花の眞に使用するので、眞に挿すのは、何れも比較的長いものである、此の花の比較的に丈け長きは夫れが為である。

（四）は



第五圖はベコニヤレックスと云ふ觀葉植物で、葉色の美なる事花に勝る位であるが、葉形も直徑四五寸ある、比較的大きいもので、且つ是は盛花の前の方へ少しく垂下せしめて、最も目立つ處へ一葉づゝ、數葉は大概挿すものである、而して如斯ものになると葉柄を僅に一寸位殘して、其處へ竹串の足を接けるのである、無論其の葉柄の截口に水苔をつけ、夫れから竹串を接くるとは、是に限らず、何れも同じてある、是は總丈け六寸位のものである。

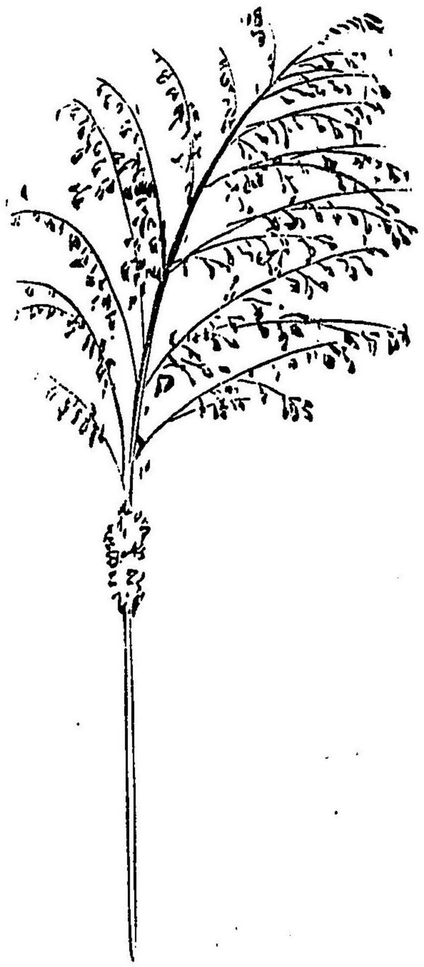
（五）は



第六圖はアジアンタム（ハコチシダ）と云ふ幽邃なる觀葉植物にして其の葉の美なる事、盛花に缺く可からざる程である、其の美は花の艶

美なるにあらずして、翠色滴るか如く、新綠柔軟にして可憐の風極れり、故に是は葉柄を長く、竹串も比較的長くして、盛花中の所々へ少しく高く、花の上へ挿すのであるから、全體に長くなつて居る、是は葉先より竹串の先端まて長さ一尺四五寸もあるのである。

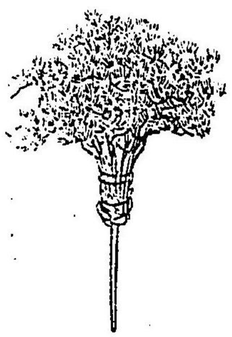
（六）は



第七圖はヒムロとて、ヒムロの樹の枝先きを截りたるもの、五六本

乃至七八本づゝ寄せ、水苔を添付せずして、直ぐに竹串を接くるのである、他は皆水苔を添付して截口を包み、補濕の用をなさしむれども、是れには其れ迄の必要を認めないから、最初より直ぐに竹串の足を接けるのである、是れはヒムロも短くあるが上に、竹串も他花卉類に使用する分の半分の長さでよいから、此のヒムロの總丈け、即ちヒムロの葉先より竹串の先端までにて、僅に四寸乃至五寸以内のものである。

(七)は



此のヒムロの他の花卉類と異り、水苔も使用せねば、竹串も短く、而して其の寄せ合せの數は多く、束は太く大きくして他の花卉類と異なる點、實に數々である。

花卉類に竹串を接ける種々の仕方は、圖解にて曾得せられしならん、

此作業か終れば、暫時にして竹筒に挿してある、竹串を接きたる花卉を、其の儘取り揚け、之を花函に併列せしめて入れ置くのである、是を花函に入るゝには、時期か花卉の乾き易く、凋れ易すきなれば、花函の底へ水苔の濡したるものを薄く敷き、而して其上へ入るゝが宜いが、然らざる時期なれば、只た水苔も何にも入れないで、其儘入るれば宜いのである、而して花卉類を花函に入るには、可成最初に使ふもの、例せは盛花の眞になる樣のもの、又は其の次ぎに挿す樣のものを、花函の上の方になる樣に入れ、盛花の後に挿す樣のものを、函の下の方になる樣に入るゝのである、然らざれば盛花を挿す時、函より、花卉類を取り出すのは、最初に使ふ花卉が下の方にあると、上の方の花卉を、取除けざれば、出すと出來さる勘定にて、甚だ手順が宜しからざれば、花卉を花函に併入するには、盛花の時

後で使ふ花卉を、下の方に入れ、始めに使ふ花卉を、上の方に入る事が、肝要な手順である。

花卉類に竹串を接ぎ、之を花函に納め入れると同時に、ヒムロとヒバの準備したるものも其花函に入るゝのである、ヒムロとヒバを特に記したのは、他の花卉類と左の相違があるからである、ヒムロとヒバの準備は、花卉類に竹串を接ぐ時に、同時に準備するも、夫れを終りて、花函に納めてからでも、何れにても宜いが、其の準備の仕方は、左の如くである。ヒムロは檜松楊樹の枝先を、二三寸つゝの長さに截り取りたるものを、五六本乃至七八本つゝを一纏にして、一本の竹串を接ぐのである、此の竹串を接ぐのは、花卉類の夫れと同様に、足として接ぐのであるが、花卉類の如き長き竹串は要さない、又水苔も要さない、故に其の異なる點は、竹串が花卉類

の分の半分位の長さで、而して又水苔を用ゐないのとである、此のヒムロは其の竹串の足と共に、盛花器中の水苔の中へ挿し込むのであるから、竹串の足も短く、水苔も付ける必要はない、如斯竹串は短く、水苔は用ゐず、而して七八本も一所に束ねて竹串を接くのであるから、他の花卉類とは餘程仕方か相違して居るのである而して是か何程入用であるか、何程準備しなければならぬかと云ふに、花卉の數を見斗ふと同じてはあるが、是は盛花器内の水苔を隠す丈けの量があれば宜い、即ち盛花器内の水苔の上へ挿して、夫れを隠すのであるのが第一の用て、而して又花卉類の下草ともなるのであるから、長さ一尺巾八寸位の盛花器で、花卉類に竹串を接きたるものにて、七十本乃至百本位を要するものなら、此のヒムロは七八本つゝ二束にして、竹串を接ぎたるもので、十本乃至十四五本もあれば

宜い、勘定である、此の勘定は花卉類の勘定より、一層概算がたて易いのである。

ヒバは榾の枝先を、五六寸の長さに截り採りたるもので、是は只だ其儘使用するのであつて、他の花卉類の如く、水苔もつけねば、竹串も接がないのである、是は唯た其の儘盛花器の周圍へ葉先が垂るゝ樣に盛花器内の水苔に、枝の本を挿すのである、是は何程入用であるかと云ふに、盛花器の周圍に、一列に挿す丈けの數があれば宜いのであるか、盛花器が長さ一尺に巾八寸位のものなら、十本乃至十二三本もあれば宜いのである、から、其の割合を以て、概算をたて、盛花器の大小及個數に從ひて、勘定をせば宜いのである。

斯く花函の中へ花卉類から、同じ花卉類の一部であるが、即ちヒムロとヒバも入れ、夫れから水苔の濡したるもの、即ち盛花器へ入る

丶分、夫れより豫備として木綿糸、及竹串等をも入れて置くのである、是は盛花を盛花器に挿すに當りて、往々竹串が折れたり、又は花が損じたり、竹串の接ぎ目か損じたりなどする事もあるから、其の用心として、是非携帶するの必要あるのです、即ち如斯花函の中には、花卉類ヒムロヒバ水苔、木綿糸竹串を入れ、其の花函を持ち行けば、何時何處にても、盛花が出來る樣にして置くのである、而して鋏と霧吹器とは別途携帶する樣に準備して置くのである。

若し僅少の盛花にして、最初より盛り上げたるものを送る場合は、別に花函に入るゝ必要はないが、盛り上げたるものを持運びすると、自然損し易すき患あるゆゑ盛り上げは自然其の所用の近邊にてするが一般で、丁度料理ものを宴會場の一隅で盛り出すと同樣であるから、數多き場合などは、到底盛り上げたるものを、遠方より運ぶな

と、云ふ事は、出來得べきわざでないのであるから、勢ひ前述の手順を履行しなければならないのである。

盛花の挿方の事

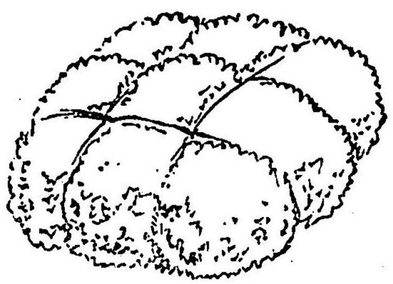
盛花の下拵か出來たれば、是から其の挿方を述べる、盛花器に花卉類を挿すには、先つ盛花器を卓上に置き、其の盛花器に入るゝ水苔、即ち水に濡したる水苔を、其の盛花器の内方の形に、卓上にて拵へ。夫れを輕く木綿糸にて、ザット縛り、例せば盛花器が、四角なれば、夫れも畧ぼ四角に、丸形なれば、夫れも丸く、其の器物の内量に準じて、其形に似寄つた樣に拵へ、夫れを其の儘、ソックリ盛花器の内に入るゝのである、圖解せば、左の如し。

(一)は丸形の盛花器に入るゝものにて、其の盛花器の内方に準して、

鈍圓形に水苔を寄せ堅め、夫れに木綿糸を縱横に掛け縛りしものである、此の木綿糸にて水苔を輕く縛ばるのは、元來水苔を盛花器中に詰め込むのに、二つの理由があつて、一は花卉類の足となる竹串を挿して。動かぬ樣にする基となるのと、又一は花卉類に水分を補給するのとであるから、是は前者の理由に基くのである、夫れは水

(一)に

(二)に



苔を唯だ詰め込みたばかりでは、竹串を挿しても、動もすると竹串が倒れ易い、然らざるも動き易くして、竹串の根がきまらぬのである、夫れは水苔に粘着性がないからであるから、木綿糸にて輕く縛つて置くのである、是は不必要の事に見えて、却て實に必要の事である。

(二)は方形の盛花器に入るゝもので、畧ぼ四方とも平になつて盛花器の内量の形になつて居る、其上へ木綿糸で輕く縛ばる事などは、前陳の理由に依るので、其他とも同樣である。

ソコデ前圖の如く、盛花器の内量に準して拵へたる水苔を、ソックリ其の盛花器に入れ、上より押しつくる時は、盛花器と其の水苔と多少の形狀に相違があつても、少しも差支なく、盛花器の形通り、内方に一杯になる、若し大層相違して隙を生ずる場合は、更に水苔

を補塡して押しつけ、器内に充塞せしむれば宜い、而して水苔の詰め加減は、少しく中高くして、器物の縁通り位で宜いのである。

盛花器に水苔を詰め終りたらば、今度は樅の挿方である、樅は盛花器の周圍へ挿すのであるが、樅には竹串の足もつけないから、其の枝の本を盛花器内の水苔に挿し、枝先きの葉が器物の外へ垂下する樣にするのである、其の數量は盛花器の周圍を一つ併べに、一周する位を度として、挿すのであるから、其の盛花器の大小に依り、一見見込立つものである。早く申さば、果物笊の中へ、果物を盛り入るゝ時、其の周圍へヒバを敷くが如き、有樣になるのである。

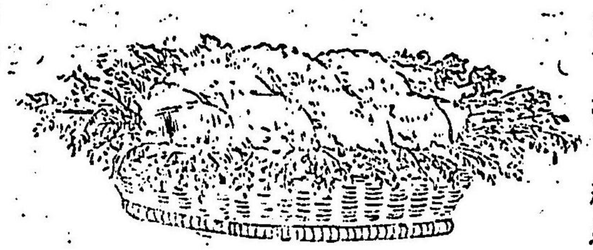
盛花器に樅を挿し終りたる後の狀は、樅の枝は三分以上も、盛花器中の水苔の中に挿されて、殘り七分の樅が、其の先端の柔き薪らしき葉先を、盛花器の縁の上に出して垂下する狀、最と愛らしき狀を

爲す、其の一例を示さば左圖の如し。

盛花器に榾を挿し終れば、今度はヒムロに挿すのである、ヒムロの

（三）

に

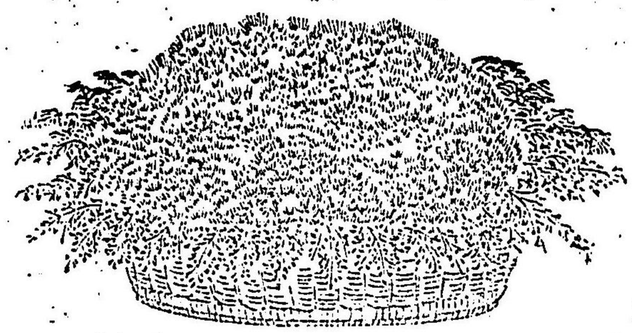


挿方は盛花器中の水苔を隱し、且花卉類を挿す下方を菁々となさしむる爲てあるから、其の加減を以て、余り密にならぬ樣、余り疎にならぬ樣に、水苔が隱れる位を度として、盛花器中の水苔の上へ、竹串の足を不殘挿し込み、而してヒムロの枝も幾分か這入り、枝の截口が水苔の水分を幾分か吸收し得らるゝ樣挿し込むのである、夫れゆゑヒムロの竹串は、短くしてあり、且つヒムロには水苔をも、截口につけないのてあるのは、其の加減を爲す

が爲めてある今ヒムロを挿しだる圖を、一例として示さば、左圖の如し。

（四）

に



如斯て盛花器に榾も檜松楊も、挿し終つたら、盛花作業上花卉類を挿し始むるに當りて、先づ盛花器に水苔を詰め込み、而して其の周圍に、ヒバを挿し、其の中へヒムロを挿す迄は、何の盛花に於ても、誰れか挿しても此の手順は同樣である。

尤もヒバもヒムロも歐米の盛花には、使用せぬと云ふことであるけれども、本邦にては之を使用する方便利で、且

つ四季何時でも採收使用せらるゝものであるから、經濟上其他に於ても、甚だ便利なる仕方となるのである。

花卉類を挿すには、盛花花卉中總體の標準となる、最も丈け高きもの、即ち俗に言ふ眞、（即ち生花の語を假り來りて分り易すく眞と云ふ）、を挿し定むるのである。

此の眞の挿し方に種々あるが、通常の挿方て八方向さのは之を盛花器の中心に挿すのである、此の眞に依つて、盛花の全體か定まるのであるから、眞を挿すのは他の花卉類の高低等の標準となるとを記憶しなければならぬ、故に眞となるべき花卉類を挿すには、盛花器と花卉類の高さの釣合から、又是に次て挿すべき花卉類との高底の度又眞として他の花卉類との釣合等、何處までも能く考へ、而して適度の高さに定めて盛花器の中央に挿すのである。

眞が挿し定まつたならば、夫れを標準として、他の花卉を挿すのであるが、其の挿方は花色および、種類の異同を能く配置し、規則正しく挿すのである、此の挿方に二通りある、一は眞を標準として夫より漸次眞を去る程低く、盛花器上面が、鈍圓形になる樣、順序正しく挿すのと、又眞を標準として、夫れより概して低きものを先づ盛花器上面が鈍圓形になる樣挿し、次て高きものを所々に挿すのとある、挿し終りたる處は、同一になれとも、其の挿す順序が異なるのみてある、總て花卉類の上等種のものは、目立つ樣能き場所を撰び、然らざれば少しく高く挿すと云ふ樣に、花卉類の配置が肝要てある、又可成は四方より見て、同一になる樣、花卉類を配置しなければならぬが、若し四方同一に配置することが出來ざる場合には、兩方は是非同一の配置になる樣にしなければならぬ。

第二實例

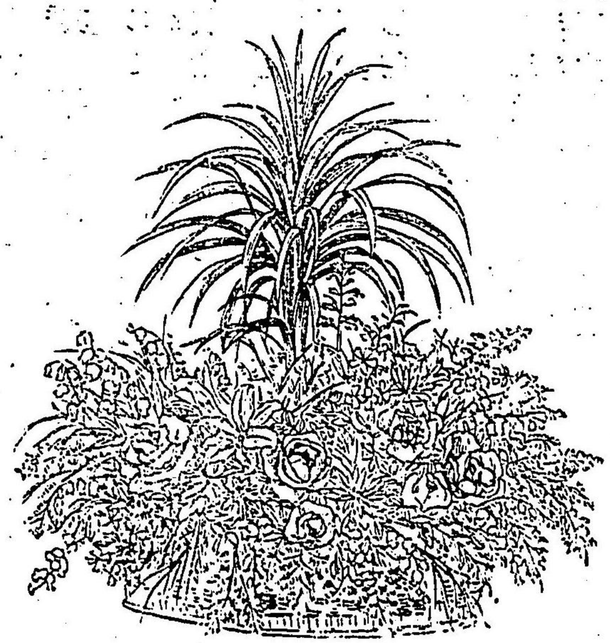
第一圖は左の花卉類を主として使用せし、通俗丸盛と云ふ八方向きの盛方である、花器は第二圖の盛花器を使用す。

一　トラセナ……眞として中央に高くあるもの

二　百合……前面左方にあるもの

三　薔薇……前面の右方にあるもの

（一）



四　ダリヤ……前面の左右にあるもの

五　藤花……周圍に垂下せるもの

六　メロゾチュース……前面各所にあるもの

七　アジアンタム……左右の各所にあるもの

八　イソレピュース……前面の下方にあるもの

其他下草用のもの種々使用せしも、其の解説を一々掲載する事を省く。

第二實例

第二圖は同じく丸盛の籠盛であつて、盛花器圖解中の第一圖に示したる花器に挿したるものである。

是に使用せし花卉類の。重なるものを列記すれば左の如し。

一　トラセナ……眞として中央に挿してあるもの

二チュリップ…前面の各所にあるもの

三ジャサント…眞の周圍にあるもの

四ミューゲー…各所に垂下狀を爲して居るもの

（二）

ほ

五イソレビユース・前面に垂下せしもの

其他下草のもの種々あれとも、此處に列記するの用なきものゆゑ省略す。

又此頃流行の盛花の挿方は多少其の趣を異にして眞の位置必ず盛花器の中心に一定せず或は左方に偏したり又は右方に偏したり多く中心にある事が少い眞が動けば自然全體の形に影響して不規則的の却て雅致ある形狀となるのである今一例を示せば、

第三實例

第三圖は籠製の花器に花卉を挿したる圖であつて、若し是れにリボンを花器の左方又は右方へ着ける時は、此の儘花籠ともなるのである、花籠に提柄のなき分は稀有てはあるが、提柄のなき分に花を挿したる場合は、是れにリボンを着けるものと、同樣である、花籠に提柄のなき分の圖解は、別に掲げざれば、此の盛花にて推知せられ

（三）

ほ

たし。

此の主要の花卉類は

一　猩々木…眞として丈け高く使用しあるもの

二　クロートン…眞の左方にあるもの

三　菊…眞の右方にあるもの

四　挪子…菊の右方にあるもの

五　ベコニヤレックス…前面の右方にある葉もの

其他下草用のもの種々あれども之を略す。

第四實例

第四圖は新式の盛花器にて、中間を明けて其の兩極に、花卉を挿すのである、即ち主客對顔の際、最も便利になつて居る裝置である、盛花が主客の對顔を遮ぎると云ふは事は、盛花の缺點となるのであ

（四）

ほ

るが、是等は大に此點を避けたるものである。

此の盛花の主要なる花卉は

一　椰子…眞として丈け高く使用しあるもの

二　菊…眞の次ぎに挿しあるもの

三　蒲公英の早咲…右方に抽出せるもの

四　石竹…右方に抽出せるもの

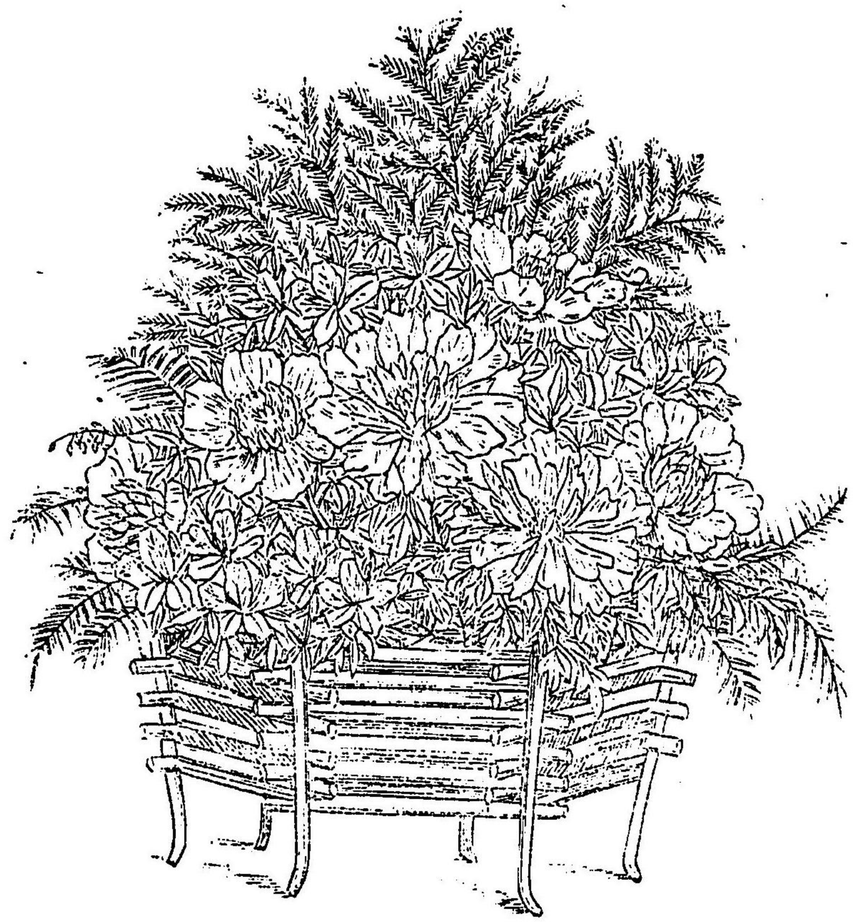
其他下草は種々あれとも之を略す、中間に車形のものあるは、花卉の運送車であつて、盛花器の全體が、二の丘嶽にかたどられて居るから、其の中間を進行しつゝある裝飾になつて居るのである。

第五實例

第五圖は框形の盛花器に、本邦在來の植物のみて、盛りたるもので、其の重なる花卉類を列記せば、左の如くなのである。

（五）

ほ



一　羊齒類…眞として中央の最上位に高く挿したるものである

二　牡丹…是は前面の中央、及其他にあるもの

三　芍藥…是も前面の中央、及其他に牡丹と相併んで居る、

四　躑躅…是は前面の左方及其他にあるもの

五　羊齒…是は前面の周圍に垂下狀に挿されあるもの

其他下草用の花卉及其他のものあれども、此處に列記するものとす。

第六實例

第六圖は重に西洋草花類を使用して、盛花器圖解中の第二圖にあるものに、挿したるものである。

此の盛花中重なる花卉類を摘記せば左の如し

一　ポインセチヤ…眞として最も高く中央に挿されたるものである。

二　シネラリヤ…眞の次ぎ左方及其他にある菊花形のものである。

（六）

ほ

三　バラ…前面の右方にあるのもてある。

四　ベコニヤレックス…前面の左右にある、心臟形大葉のもの。

五　アジアンタム…周圍の挿されたる葉もの、

其他使用せる下草ものは之を略す。

總て盛花には挿す本數に制限なく、又花卉の長短に定りもなく、其の花卉の種類も自由であるが、此樣の挿方には花卉を、少しく長く截り取りて使用するゆえ、自然其の本數は、大に減じ得らるゝのである。

以上は何れも、十二三人位迄の客には、此の位のもの一個にて宜し、又客數が增加し、從て卓子が增加するに從て、其の數を殖せば宜しい。

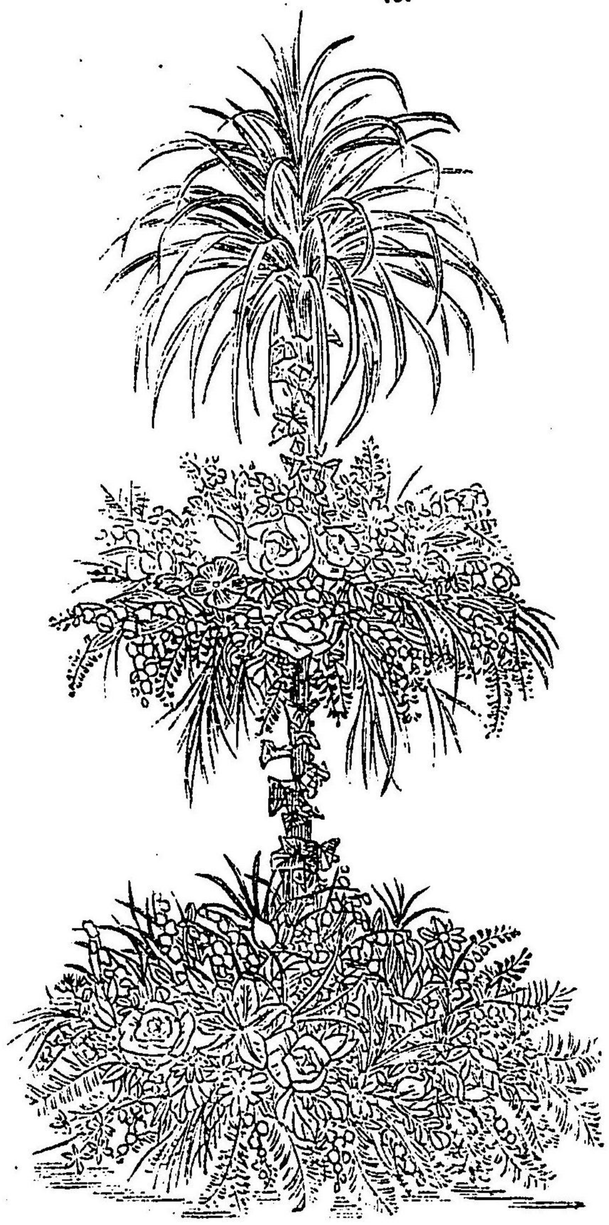
又宴會が一層大きくなり、器物の大なるものを用ねばならぬ場合に

なると、盛花器中第十圖形の足の低き左の如く花卉を挿すのである、此の挿方は普通の丸盛の一例を示したのであるが、此樣の盛花器に盛花を爲すには、先づ三段の凹所に水苔を詰め入るゝのである、其の詰め入れ方は前に述べし通り、木綿糸にて輕く縛り、其の詰め入るゝ所の、形になして入るのである、而して夫れに花卉の足、即ち竹串を挿すなど、別に異る所はないが、只だ最上段を眞に見て、其の心持で挿し、其他何れも、垂下狀に挿した方が、躰裁が宜い。而して此の三個の連絡を絶たぬ樣に、中心の棒に纏繞植物をからませるのである。

第七實例

第七圖の盛花を三段に花卉を挿すゆゑ、之を三段盛りと云ふ、盛花器に花卉を挿す事を、花を盛ると云ふ即ち挿し上がり

ほ（七）



たるものを盛花と云つて、盛り上げたものと云ふのが、通語である、是は盛花と云ふのであるから、花を挿す事を盛ると云ふのは、或は

却て穩當であろうが、初學の人、又は左なくも、文字上より紛らはしきゆゑ、此處には之を出來得る丈け避けて、挿すと云ふ字を使用する事に一定した積りであるが、處によりては盛ると云ふ字を使用した方が分り易い處もあつた樣である、是は序ゆゑに付記して置くのである。

此の大宴會用の盛花に、使用したる花卉類の、主要なるものを摘記すれば左の如しである。

一ドラセナ：眞として最上段に高く、且つ垂下せしめて、挿したもの

二薔薇…中段の中央と、下段の中央に挿したるもの

三チュリップ…中段と下段の左方にあるもの

四百合…中段と下段の中央にあるもの

五シネラリヤ…中段の右方と、下段の左方にあるもの

六ミユーゲー…の中段と下段の前面に垂下せるもの

七ジヤサント…中段と下段の各所に直立せるもの

八アジアンタム…中段と下段の周圍に垂下せるもの

九イソレピース…中段と下段の周圍に垂下せるもの

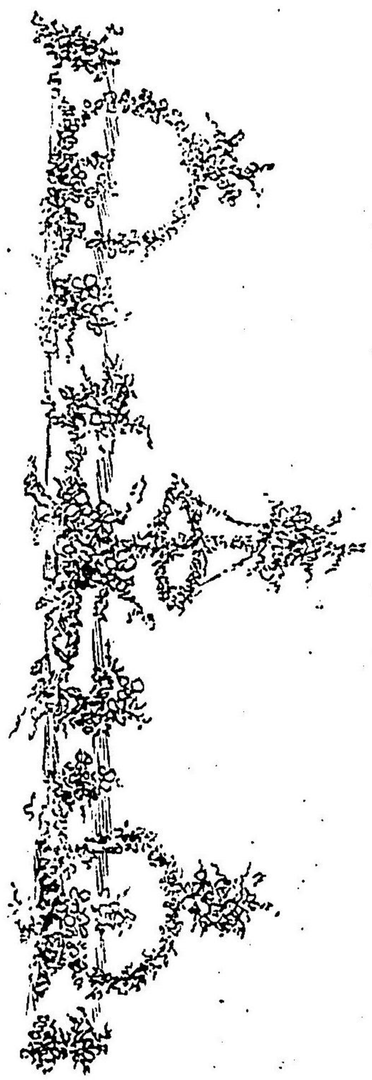
十オカメツタ…中軸を纏繞せる蔓もの

其他下草用に使用せるもの種々あれども、之を略す。

第八實例

第八圖は盛花器第八圖に示したるものを、使用したる大宴會用の盛花であつた、如斯盛花器を使用する場合は、花卉を挿すは、僅に各器とも中央の小部分であつて、他は蔓性のものを使用し、夫れに種々の花を着くるのが多い。

（八）



今是れに使用せし花卉類の主要なるものを擧ぐれば

一　スミラックス…三個の輪狀を爲し居るものに纏繞せしめたるもの

二　オカメヅタ…三個の輪狀を爲したるものに纏繞せしめたるもの

スミラックスと共に使用せられ居るもの

三　アジアンタム…最上部と最下部とに、使用せられ居るもの

四　重瓣ペチュニア…各要所に配置しある花

五　ヒビスカス…各要所に配置しある大輪の花

六　ヘリオトロップ…各上部の要所に配置しあるもの

七　白花リラ…各要所に垂下狀に、又直立狀に配置しあるもの

八　オイエー…各要所の上部、下部に通して配置しあるもの

九　薔薇…オイエーと同じ

十　ナスターチユム…是は中軸に纏繞せしめたるもの

十一　オンセヂューム二種…三ヶ所の最上部の、眞に使用しあるもの

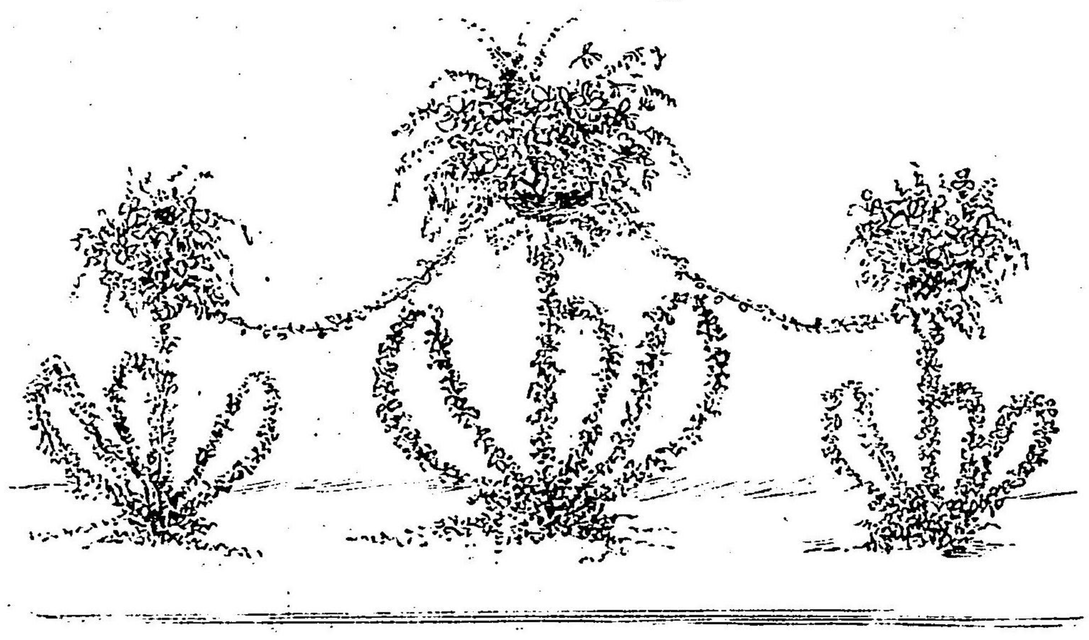
其他下草に種々使用せるものあれども、一々列擧するものを省く。

第九實例

（九）

第十實例

（十）



第九圖及第十圖の盛花は、第七圖の盛花の如く、大宴會に使用するのであつて、纏繞性のものを多く使用して居る、其の花卉類の重なるものを、兩圖より摘記せば

一ファレノプシス…是は兩圖の最上部にある、眞に使用せるもの

二オンセヂューム…是も兩圖の最上部にある、眞に使用せるもので、ファレノプレスと混用せられて居る、種類に依りては花期を大に異にするあれども、種類に依りては又時期を共にするあり、此處に使用するものは、無論開花期を同くせしものである。

三アスペラグスプリモサ…是も兩圖の最上部に、枝端を短く垂下狀に挿したるもの、

四アジアンタム…是も兩圖の上部にある、垂下狀のもので、上部の各所に使用せるもの

五スミラックス…是は第十圖の中央より左右の盛花に連絡せる線に、纏繞せしめたるもの

六オカメヅタ…是は第九圖の環狀になりしもの、又第十圖の環狀になりしもの、及其の柱軸に纏繞せるものに使用せるもの

七ヘリオトロップ…上部の各要所に配置せるもの

八オイエー…上部と下部と通して、各要所に配置せるものである

九シクラメン…上部の要所に抽出せるもの

十プリムラ…下部の各所に配置せるもの

十一フリヂヤ…上部に垂下狀に配置してあるもの

十二パンシイ…兩圖中の環狀になり居るオカメヅタの纏繞せる中

問に散着せるもの

十三　シチラリヤ…兩圖中の環狀になり居るオカメヅタの纏繞せる問に散着せるもの

其他下草用に使用せしもの種々あれども、此處には之を略す。

如上第一圖より第二圖迄の盛花の圖解は、普通行はるゝ處の挿方であつて、今日一般に行はれつゝある處である、而して第三圖より第四圖までは新式の挿方であつて、第五圖及第六圖は共に其の中間に位する新式の一である。

第七圖以下は何れも大宴會用のものであるが、八圖以下のものは其の總ての形狀大に異れるを以て、茲に一言し置くのであるが、是等は盛花器が全く搆造を異にして多く亞鉛線にて種々の形を爲し、其處へ水苔を付着せしめ、花卉類を是に付着せしむるの例が多い。

總て盛花は主客相對したる、其の中間に置くものなれば、低き盛花器に低く挿すのは差支なきも、器物が低くして盛り樣も低き時は、至て見榮のなきものなれば、自然に器物も亦挿し方も高くすると云ふ樣になる。

器物が高くなり、挿し方が高くなると、主客相對したる相互の顏を見るを能はざるに至るから、可成此の缺點を避けて挿す事をしなければならぬ。

故に高臺のものは、上段下段の間を透して、其處より相互の顏を見る樣にしてある、例せば前に掲げし三段盛りの如し、又新流行の盛方の分の如き、何れも其中間を低くするか、若くは全く明け置くか、此點に注意してあるのである。

將來盛花の挿方は如何に變化して行くや、又如何なる挿方か流行し

來るや、其の邊の豫想は確と出來難いけれども、在來の丸盛と云ふ、即ち扁圓形に規則正しく花卉を挿すのと、又室内裝飾用に、大花瓶に花を挿すのに本邦の葬花に類似せる挿方を爲すのとは、將來本邦人に永く翫賞せらるゝや否や本邦人の嗜好に適したる挿方なるや否や、是は疑問に屬する事である、即今不規則的盛花の挿方が歐洲に行はるゝ由であるか、此の挿方は本邦の將來に於て永く歡迎せらるゝならんと思はるゝのである。

夫れにしても本邦現在の盛花は、其の花卉に於て挿方に於て、杜撰極まるものか多いけれとも未た盛花に就きて其の善惡を言ふ人はない樣である、偶々あるも其は僅少の人に過ぎないで、盛花などはドーでもよいと云ふ樣な人ばかりである、何故に盛花に限らず、其他花に對する觀念の比較的冷淡であるかと云ふに、自然の美に富みた

る本邦にありては、其の自然の美に馴るゝのも一因であらうが、其の多くは花に對する智識の乏しきによる事と思はる。

或る盛花專門家の話を聞くに、歐米諸國人の花に對する情は、實に濃厚なるものであつて、從つて花に對する智識にも富んで居る、故に一般に花を翫賞する事は、本邦人の想像にも出來難い位である、從て宴會の食卓上の盛花などは、殊に注目する所であつて、食卓上の第一の馳走となるものは、他の數多き食品でなく、飲用品でなくして、即ち盛花――盛花の珍稀なる美花である、故に新美を競ひて費用を吝まないのが、彼の國々の風である、如斯であるから、中形の盛花器で、一器に盛り上けたる花卉類の代價は、蘭科のカトリヤの類やファレノプシスの類を數多く使用する場合は、少くも二百圓以上となる由にて、一器の代二三百圓と云ふのは珍からぬ、甚だし

きは一器の花代二千餘圓に及ぶものありとの事である、是は稀有の事であつて、一般の例には出來ないが、此の實例として英國の或る花卉栽培店の一話がある、其は一貴婦人來たりて、同店に開花せるバンダロビーと云ふ蘭を見て、其の價格を問れしが、店主は答て二千圓なりと言ふ、貴婦人一考して之を諾し、ポケットより二千圓を取出して支拂ひ、只だ其の花のみ截取らしめて持歸つた、是れ其の夜の盛花に使はんとにありしと云ふ、果して之を盛花に使用したらんには、是に準して他の花卉も數多ある事なれば、其の盛花二千圓や三千圓になるは無論である、但し是は特別の事實で、無論多くある事ではないが、併し如斯大金を投じて挿したる盛花も、全く花に對する智識に乏しき人が見たらば、決して其の價格の何にあるか、又何處に挿しある花が、左樣に高價なるものなるや氣つかざるてあ

らうが、流石は狂氣の如く花を愛する國風の人々なれば、固より蘭科中のバンダーの花は勿論、バンダロビーの珍花は、其の形狀如何である位の事をも、聞知する人々多ければ、斯かる珍花を盛花として挿す時は、見る人々も直ちに其の珍稀なる花を見しを喜び、歸宅第一の土產話は、先づ此のバンダロビトの花を見た事を以てするのである、家庭に於ける花卉の話は、最も歡びを以て迎らるゝ風あるから、斯かる珍らしき花を見しとの土產談ある時は、其の家庭に於ける喜悅は、飲食品の土產に勝る事幾層倍である、總て家庭に於ける談話が、常に自然の美を談ずるとか、斯かる花卉の種類とか、美妙とかを話す樣なれば、大に人心を高尙に導く樣になつて、間接の利益も亦莫大である、動もすれば人々相集ると、人身攻擊談が花を咲かす事が多い、去れども斯く植物上の談話とか、花卉の美を談す

るとか云ふ樣になれば、無益有害の談は變じて、有益有利の話となるのであつて、特に家庭に望む所であるとは、予の感を同らして聞きし所である。

敷花法

敷花とは、食卓上の中央に盛花器、果物器、菓子器、燭臺等を併列若くは適宜配置せられたる、其の間の空隙に、盛花と連絡せしめて、美しき花や、葉又は蔓ものを敷き、其の空隙を程よく飾りて、却て美化せしむるのである、之を卓上の敷花と云ふ。

敷花は如何なる食卓に使用せらるゝかと云ふに、小なる食卓にも大なる食卓にも使用せらるゝ事あれども、小なる食卓は空隙を生する事少ければ、自然敷花を要する餘地がないが、大なる食卓となると、

自然空隙を生すると多いから、敷花をして其の空隙を飾らねばならぬ、故に大なる食卓には敷花を要する事か多い、されど敷花は必ず食卓の大小にも限らない、特に注意して食卓を飾ると云ふ、場合に應用せらるゝ事と思意するか、最も穩當である、早く言へば敷花は特に食卓上を裝飾すると云ふ事にして、斯かる場合に使用せらるゝのである。

敷花に要する材料

敷花に要する材料は花卉類であつて、是には盛花の如く水苔とか竹串とか糸とか云ふ樣な種々の雜品は要せない、只だ花卉類のみである。

花卉類は何を使用するも差支ないのであるが、可成は保水の能き丈

夫なる方の花卉か宜し、蓋し此の敷花には盛花の如く、水苔を以て水分を補給する等、其他總て水分補給の裝置は、一切ないからである。

花卉類の事

今敷花に要する花卉類にして、其の多く使用せらるゝものを摘記せば、左の如くである、

スミラックス……是は葉の麗はしき蔓の柔軟なる最も優美なる纏繞性のものである。

アスペラクス　プリモサ……是はアスペラグス中最も細小なる葉も有つ蔓性のものであつて、其の幽粋なる事他に比を見ないのである。

ヒカゲノカヅラ……是は本邦在來の愛らしき蔓性のものである。

エーザンゴケ……是も本邦在來の蘚苔類の一種で、接合せる時は意の如く長くなるゆゑ、斯かる材料に適して居る。

オカメヅタ……是も本邦在來の蔓性植物で、四季落葉する事なく青々たるものゆゑ、最も使用に便なるか爲め、本邦にては多く之を使用す

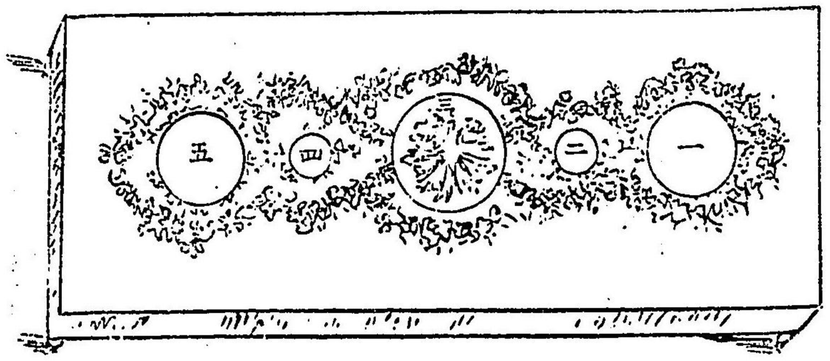
以上の外總て纏繞性のもの、及其他蔓性のものにして葉のよろしきものは何に限らす、使用せらるゝのである、而して是に付着せしむる花は比較的柔弱ならざるものが宜いけれとも、強ち然らさるを得すと云ふてはない、僅少の時間中使用するものゆゑ、何種の花たるを撰ばないのである。

敷花の敷き方の事

敷花を敷くには、先つ豫て準備したる蔓ものを、能く清淨に掃除し、盛花器の下に、其の蔓の本を挿し、夫れより種々の形狀に削はしめ、其の蔓に種々の美しき、花を着けるのである、花は僅に花梗を付したるものであるから、之を其の蔓の下に挿入し、恰も其の蔓より花か咲きし樣にするのである、又花は一色ならずして色數も多く、又花の種類も種々あつて形狀も亦異つたのが宜い。

人に依りては蔓も一種類て、花も一種類と云ふ、極單純なる敷花を爲すものあり、又盛花器の下より蔓を出さず、初めより盛花と離して、其の周圍大きく長方形に蔓を敷き、其の蔓の内へ花又は葉ものを敷き、或は其の長方形の蔓に、花を着くるもありて種々あれども、夫れは必ず何れを是とし何れを非とする事は六敷い、蓋し其の盛花

（一）



に對して釣合の宜しきを是とするからである、加之又一般の好みにも依る事である、左に敷花の一例として二三の實例を示さば

第一實例

（一）は燭臺
（二）は菓子
（三）は盛花
（四）は菓物
（五）は燭臺

此の食卓上の配置は種々ありて一定せるものではないが、普通多く配置せらるゝのは右の樣である

前に掲げし第一圖の敷花の圖は、盛花

一　器と菓子皿と菓物皿と燭臺とを併列したる食卓上に、蔓物を盛花器の下より這出さしめ、器物の配列したる形に、其の器物の周圍を這はしめたる圖である。

是に使用したる重なる花卉及蔓ものを摘記せば

一　オカメツタ…是は盛花器の下より這出せしめ、右方の菓子皿より其の次ぎの燭臺を廻り、更に右方の後面に同樣に這出して燭臺の所にて接續す、

又左方に於けるも同樣である、

二　山茶花…是は盛花器の下より這出て居る、オカメツタに付着せしむるのである、

三　シヂラリヤ…是は山茶花と同樣に使用するのである

四　バンシイ…是も同樣に使用す

五　雪割草…是も同樣にオカメツタの葉間に花梗を差し入れて、恰も夫れより出てし花かの如く、着花せしめるのである、

是は何れも同樣である

此外付著せしめたる花、數種あれども、一々列記するを省く

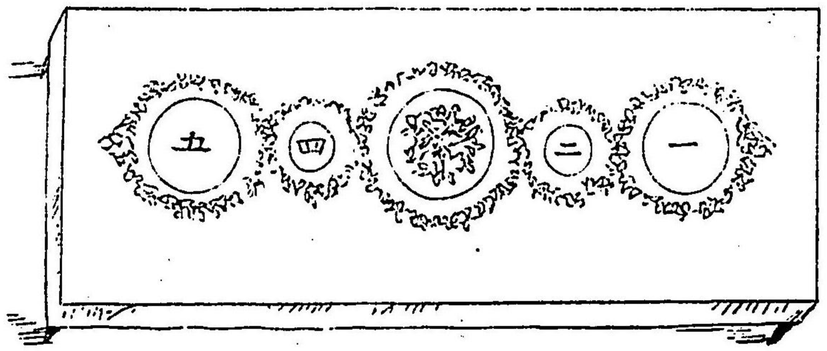
此の第一圖の敷花は、本邦在來のオカメツタを主なるものとして、之を盛花器の下より這出さしめ、僅に器物の配置しある形に從ひ、延曲せしめ、夫れに數種の花を付着せしめしに過ぎないので、餘り面倒なる敷花ではないのである。

第二實例

一は燭臺
二は菓物
三は盛花
四は菓子

（二）

へ



五は燭臺

此の食卓上の器物の配置も、第一圖と同しく、普通の配置方である

此の第二圖の敷花は、第一圖と其の形狀を類似すれども、第一圖の夫れより容易である、是は盛花器の下より這出さずして、全く器物の形狀なりに、蔓ものを這はしめ、夫れに種々の着花をなさしめたるものである。

第二圖の敷花に使用したる、花卉類の重なるものは、左の如くである。

一スミラックス…此の蔓性を利用して、之を敷花の主なるものとして、器物の周圍へ其の配置の形狀に、這はしむるのである、

二シデラリヤ…蔓ものの花として、所々に付着せしむるのである

三雪割草…蔓ものの花として、所々に付着せしむるものである、

此外に三種を用ゐしも茲に列記するを省く。

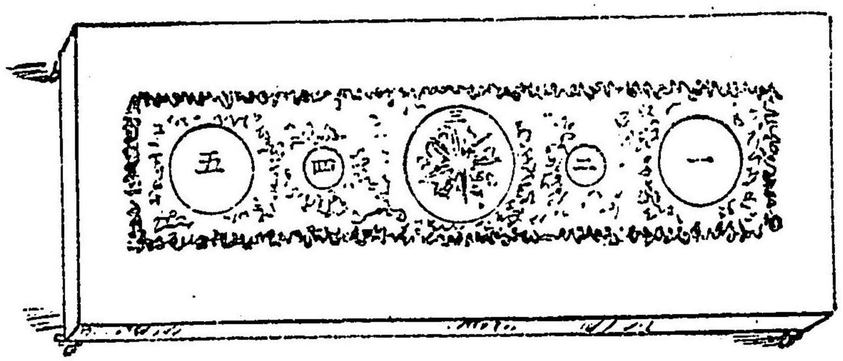
第三圖及第四圖に示す敷花の圖は、食卓上の器物の配置に就て何れも同しであるか、是は器物より少しく離して、長方形に、蔓物を這はしめ、其の內部へ全體に、葉もの花ものを敷くのである、尤も第四圖の分は外部に長方形に蔓ものを這はしめ、其の內部に葉もの花ものを敷くのは除いて、其の蔓ものに點々附花せしまでの、一層簡易なる敷花である、詳細は使用花卉の解說にて、知る事を得

第三圖に使用せる花卉類の主なるものは

第三實例

（三）

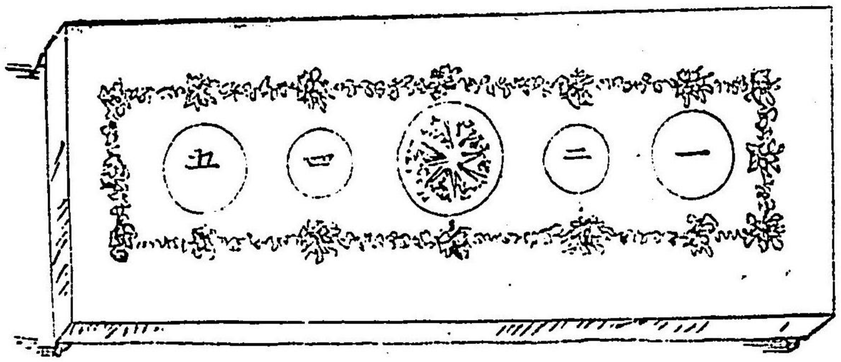
へ



第四實例

（四）

へ



一ヒカゲノカツラ…器物の周圍に、長方形に蔓ものの、這はしめあるは、此のカツラである

二エーサンゴケ…長方形に蔓ものの、這はしめある、內部に菁々と敷き詰めあるは、此のエーサンゴケである、無論全體に厚く敷く必要はないが、さればとて余り疎なるも面白からず、只た全體か、薄く菁々となれば宜い、而して其內へ點々と花を敷くのである。

三山茶花…エーサンゴケを敷きたる中へ、點々所々へ挿し置くのである、是れには少しく枝をつけた方が便利である。

四桃の花…エーサンゴケの中へ、點々敷くのである、山茶花と同樣である。

五タンポポ…是もエーサンゴケの中へ、點々挿すのであるから、

花梗を付して採花するか宜い。

其他の花花卉は玆に列記を略す。

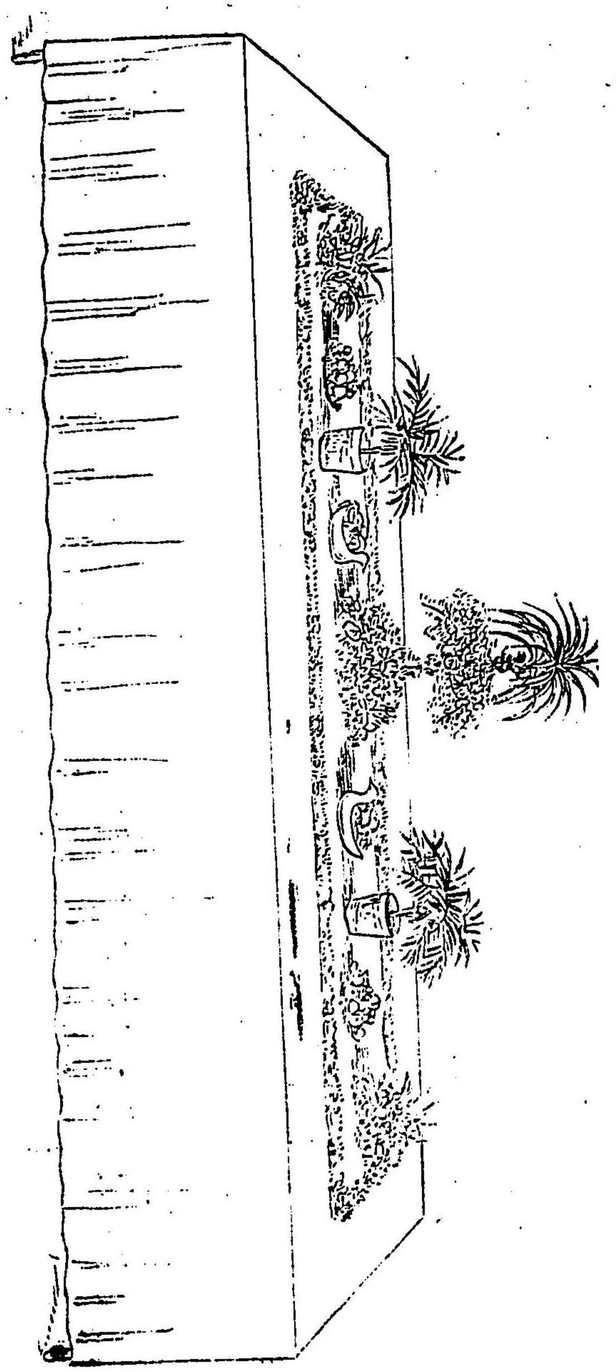
第四圖は第三圖と殆ど同しであるか、是の敷花は第三圖より簡易なるだけ、材料を要せない、今重なる使用花卉を摘記せば左の如し

一　オカメツタ：長方形に、器物の周圍に敷きたるは、此のオカメツタてある。

二　シヂラリヤ：長方形に敷きたる、其のオカメツタの葉間に一定の距離を置きて、此の花を挿す、此花、花梗を付して採收すると必要である。

三　パンシイ：是もシヂラリヤを同樣に使用するゆゑ、花梗を付して、採收する事必要である。

此外使用せる花卉あれども、玆に列記するを略す。



飾棚上卓（五）

第五圖は食卓上へ盛花及菓物、菓子を始として其外盆栽をも配列したので前述せし食卓上の器具の配列と其の趣を異にしたる裝飾圖である。

今此の圖に就き其概畧を解説せば、盛花および、敷花の事に就き、且又食卓上の裝飾方に就き、大に參考となる事もあれば序に此處に挿入して以て其の解説の極要を試みんと思ふのである。

中央に三段盛の盛花が陳列してある事は、已に陳列し來りし記事に依つて、一見してそが盛花の大宴會用に多く使用せらるゝといふ事がわかる。

其左右に鳥形の皿に盛りたるものあるは、即ち菓子であると云ふ事も、亦是迄の陳述に依つて、略ほ推察が出來るであらう。

其左右の次ぎにあるものは、是亦盆栽であると云ふとは、一見して分るであらう、實に是は椰子を栽たる盆栽である。

其左右の次ぎにあるものは、果物の皿に盛りたるものである、果物と菓子とは、往々其の配列の順序を交換するともあるのである。

其又左右の次ぎにあるものは、盛花の平盛である。

以上の諸器物の周圍を、三寸位離して、長方形に敷いてあるものは、則ち敷花である。

如上、是迄の卓上器物配置と、相違せる事も、分るであらうが、夫れと同時に、卓上器物陳列には、種々の配置方があると云ふ事も、推察が出來樣と思はるゝのである。

襟挿法

襟挿とは香氣よき美しき花を、小く束ねて、宴會其他へ臨む時、ボ

タシボールに挿して行くものであるが、其の形狀は男子の分は小くして、女子の分は大いのが例である、歐米諸國の風習として、競ふて此の襟挿の美しきを好むと云ふ事である。

本邦にては、宴會には盛花および敷花の如く、豫て之を主人側にて調製し客の食品の側に配付し置きて、散會の時銘々持歸らしむる樣なつて居る、是は將來如何に變ずるか現在は如斯である、而して其の襟挿の製方の男子用のものは、小く、女子用のものは比較的大ぎくなつて居る事は、是は歐米諸國の風と同一である。

襟挿に要する材料

襟挿は如何にして製するものであるかと云ふに、左の材料より出來て居るのである。

一　花卉類
二　細銅線
三　鉛紙（通俗銀紙）

一　花卉類は何れの花卉でも宜いが、可成は芳香ある美しき花が宜い、殘らず芳香のものを使用するには及ばぬ。

例せば薔薇、スミレ、ジャサント、オレゼタ、ヘリオトロップ、オイエイ、バンシイ、プリムラ、ベコニヤ、ダリヤ、ブバルヂヤ、シニクシヤ、ユーカリス、ミューゲー、菊等の類

二　細銅線は可成細小なるのが宜い、是は花梗又は莖に挿入するのと、又花卉を結束との用てある。

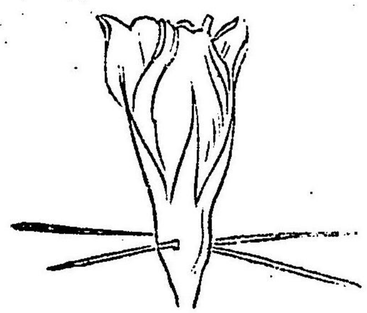
三　鉛紙は是は通常銀紙と云ふて居るが、在來の銀紙ではない、舶來の銀紙と云ふべきか、鉛紙と云ふべきもので、瓶の口を密封するに

一般に使用せられて居るものである、是は襟挿の柄を包む爲である。

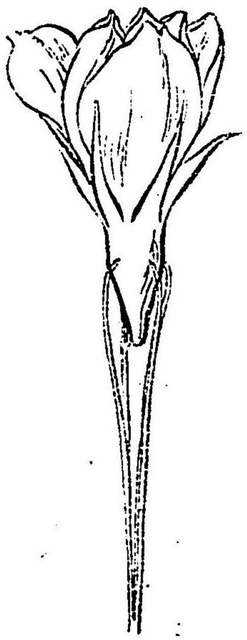
襟挿の拵方の事

襟挿を拵へるには、半開の花を撰用するのが肝要で、十分咲きたるは宜しからず、而して其の半開の花の大なるものは、之を蕚の下より枝を切り、花のみにして其花の蕚の處へ十支字に(一)圖の如く細銅

(一)と



(二)と



(三)

線を挿し通して、之を(二)圖の如く左右に分け(三)圖の如く一所にして之を花の柄にするのである。

而して其の前へ、小なる花二三個乃至四五個纏めて、花梗を細銅線にて結束り、之を大なる花の、即ち其の主となる花の前に置き、裏に葉を添へて、一所に細銅線にて結束るのである、而して其の結束りたる柄を鉛紙にて包むのである、此の柄は男女とも小い方が宜いが、男の分は別して小くしなければ、ボタンホールに這入らぬ不都合を來たすこともある。注意すべきである。

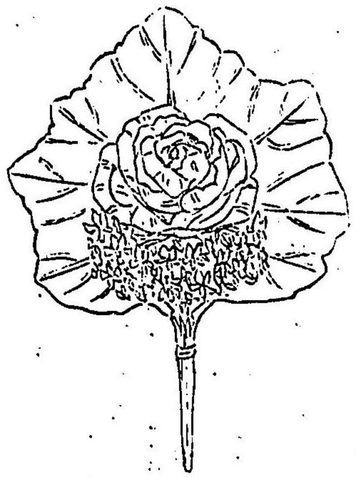
例せば男の襟挿なれば左の材料にて

バラ半開花　壹個　花色桃色のもの
スミレ花　五個　花色紫又白のもの
ゼラニーム葉　壹枚

右バラの花を主として、夫れにスミレを前に添へ、其の裏へゼラニームの葉を付して、此の三つ、即ちバラの柄と、スミレの花梗と、ゼラニームの葉柄とを、一所に細銅線にて結束るのである、而して結束りたる所を鉛紙にて、躰裁よく包み置くのである、是か襟挿の柄である、如斯して男用襟挿は出來るのである。

今之を圖解せは左の如くである。

(一)



又女子用の襟挿になると、花卉の數も多くなり、從て其の形も大きくなるので、其の拵方も多少異つて來るのである、一見した處は、男子用の分の大形と見て大差ないが、其の拵方に於て

は、男子用の薔薇の如く、花梗を全く取除き、蕚に細銅線を十文字に挿して、更に細き柄を拵へるが如きことはない、蓋し女子用の分は、男子用の夫れの如く、柄の小なるを必用とせざるからである、

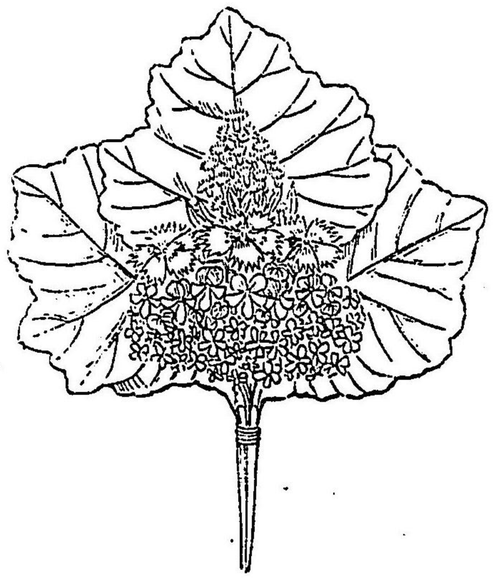
今其の拵方の一例を左の材料にて示さば

ジャサント……壹本（花色白のもの）
バンジイ……二個（花色紫黄白のもの）
バラ半開……一個（桃色のもの）
ヘリオトロップ……二本（紫色のもの）
ゼラニーム葉……三枚

右ジャサントを眞にして、花梗に細銅線を巻き。其の前にバンジイ二個を置き、之を一所に細銅線にて巻き、其の裏にゼラニームの葉一枚を添へて、之を巻き、更に前面の中央に、バラの半開の花一個

を置き、又之を卷き、其の下方全體に、ヘリオトロップ三本を置き、之を一所に卷き、其裏へゼラニーム二枚を添へて、之をも一所に卷き、其の柄に鉛紙を卷きて、花梗や銅線を隠すのである、鉛紙を卷くは、總て體裁に止まるのみである、今之を圖解せば

（二）



第二圖の女子用襟挿は、其の材料として、花卉類を述べし通り、ジャサントが眞になり、次ぎにパンシイ、其の下中央に薔薇の半開のもの、其の下がヘリオトロップで、裏にゼラニームの葉三枚付

着して、出來て居る。

總て襟挿に使用する花卉は、何れも余り長からず、大概花は花梗を付する位、又葉は葉柄を付する位にて、截り採るのであるが、男子の襟挿のみは、可成其の柄の小なるを欲するが爲め、花梗も大なるものは、之をも截り去り、等の處へ十文字に細銅線を挿して、柄の代用をもさせる事は、前に述べしが如くであるが、女子の分は上の方、即ち眞の分より順次に細銅線にて卷き、花卉を添加するのであるから、男子の如く面倒なるものは少い。

前陳の理に從ひて、更に他の花卉を以て、男女用のものを拵へ見れは、左の如し花卉材料は

ユーカリス……一本（花色白色のもの）

ヘリオトロップ…二本（花紫色のもの）

ゼラニユーム……一枚

右にて男子用のものを製する時は、左の如きものとなる。

第一實例

又左の花卉を材料として、女子用のものを拵へる時は

オレゼダ……一本

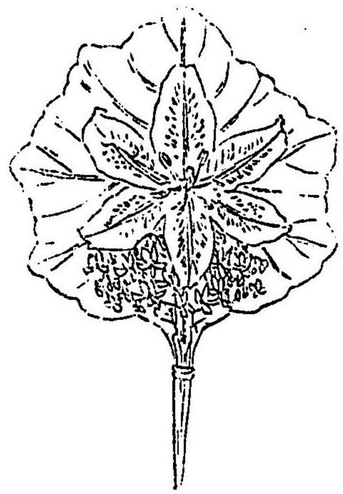
ヘリオトロップ……二本

花色紫のもの

オイヱー……三本

花桃色のもの

（三）



ち

スミレー……五本　花色白のもの

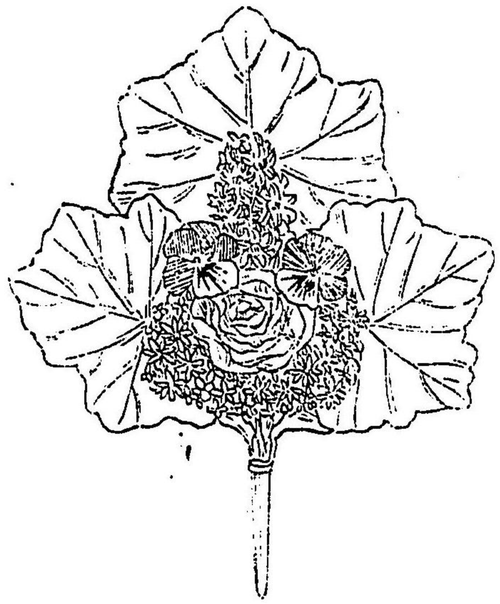
パンシイ……三本　花色紫黄白のもの

ゼラニューム葉……三枚

右にて女子用のものを製する時は、左圖の如きものとなる。

第二實例

（四）



ち

第四圖の女子用のものは材料を述べし順に、オレゼタを眞として次にヘリオトロップ、其次に撫子其の次にパンシイ其の次きがスミレて、裏にゼラニユーム三葉ありて、全く出來し居るものてある。

襟挿の拵方に就き注意すべきは、男子用は普通一輪のものなれども夫れにては餘り清楚に失して居るからとて、副として小花のものを添付する事となり、又女子用の方は、艶美なる方宜敷ゆゑ、自然花數も多く、且大きくなつて居る、又柄に就いても、男子用の分はボタンホールの穴に入れるのであるから、可成小くするのであるが、女子用の分になると、針にて留める事になつて居るから、此の心配を要せないのである。

今歐米にて行はれ居る、婦人社會の襟挿の大なるものを示す時は、左の如きである。

但し是は一般に行はるゝにあらざれども、一部の人々に愛翫せらるゝのである。

第五圖及第六圖は何れも大形用の婦人襟挿の圖である。第五圖は斜

(五)

(六)

襟挿の拵方に就き注意すべきは、男子用は普通一輪のものなれども夫れにては餘り清楚に失して居るからとて、副として小花のものを添付する事となり、又女子用の方は、艶美なる方宜敷ゆゑ、自然花數も多く、且大きくなつて居る、又柄に就いても、男子用の分はポタンホールの穴に入れるのであるから、可成小くするのであるが、女子用の分になると、針にて留める事になつて居るから、此の心配を要せないのである。

今歐米にて行はれ居る、婦人社會の襟挿の大なるものを示す時は、左の如きである。

但し是は一般に行はるゝにあらざれども、一部の人々に愛翫せらるゝのである。

第五圖及第六圖は何れも大形用の婦人襟挿の圖である。第五圖は斜

（五）

（六）

に襟に着くる分にバラ、プリムラ、バンシイ、アジアンタム、の類にて拵たるものである、第六圖は只た大形にして花を束ねたる異例の襟挿であつて、斯かる形狀のものも行はれある事を示せしもの、ダリヤ、リラ、ノーセンハレン、アジアンタム等を使用せしものである。

花籠法

花籠とは提籃形の籠に花卉を挿して、人に贈るのを云ふので、又之を贈り花とも云ふ、是は多く婦人に送呈するのが例であるが、其の大體に於ては、卓上の盛花と異なる所は少いが、花器が異なる丈け、其の花卉の挿方も違ふのである、尤も花器も提籃形の籠のみ使用せずして、盛花器同樣のものを使用する事もあれども、其は稀有であつて、其の多くは籠に拵あるものを使用す、故に一般に花籠と云ふ位である、若し強て盛花器同樣のものを使用せし場合は、其の器物の一隅にリボンを着けて、花籠として贈り花となすのである、左に花籠に要する材料を摘記せば

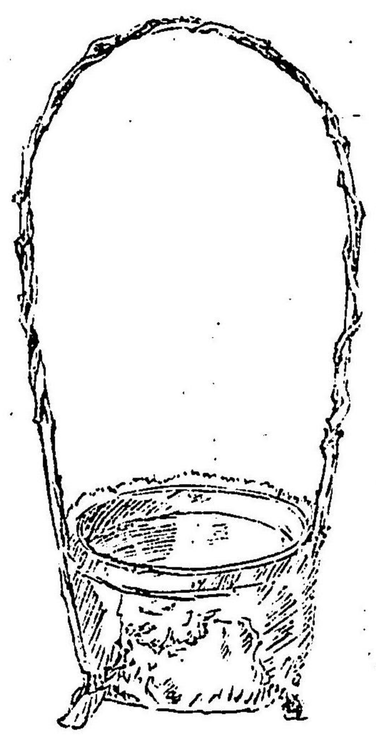
一　花器
二　花卉類
三　チュール、リボン、水苔、竹串、糸、

(一)花器の事

花籠に使用する花器は、多く籠を使用するを以て、花籠と云ふ位であるが、籠の外、又盛花器と同樣のものを使用するともあるです、左に花器の圖を示さは

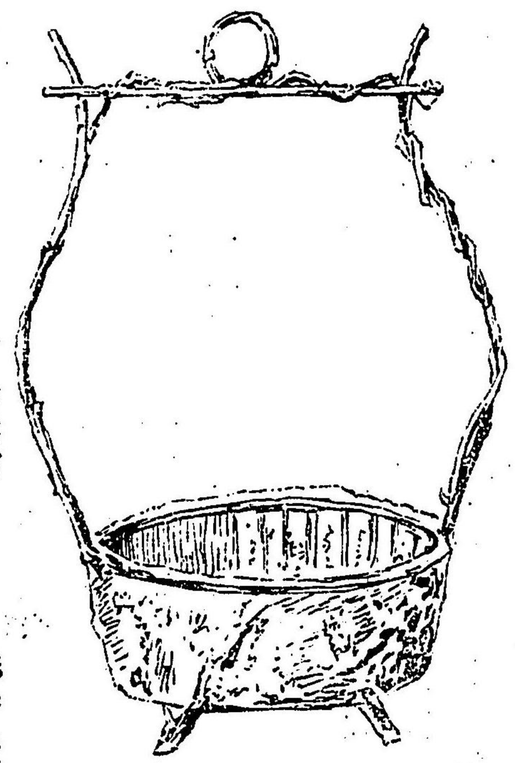
第一圖の花器は籠製のもの、及び木製又は金屬製のものもある、普通多く使用せらるゝ形にして、使用に便である、籠の直徑八寸乃至一尺、高さ二尺乃至三尺の間のものなり。

(一)



第二圖の花器は竹又は藤にて製したるものが多い、周圍の直徑一尺乃至一尺五寸、總高さ二尺乃至三尺の間のものを使用す、其他枚擧に遑なき程種々の形狀と、又種々の品質とあるが此處には其の圖解を省き、僅に需用の解說に止め置く。

(二)



花籠の形狀には制限はない本邦在來の花籠、即ち竹籠にて煤塗りの古來、造花を挿されつゝありし、形狀のもの、其他腰高とて、籠の下に臺をつくる樣製したるもの、等現に籠商店などに澤山あるもの

皆花籠用に適して居るのである、本邦の竹籠を煤塗するが如く、前第一第二圖の籠の如きも、藤にて製したるものは、金箔又は銀箔を塗りて、使用するものもあると云ふ事て、歐米にては少し上種の花卉を使用する時は、箔塗のものを使用するが、一般の風に聞く。

兎に角盛花には提籃形の花器は、一切使用せないのであるが、花籠に於ては是と反對で、專ら提籃形の花器を使用するのである、即ち提柄のある籠、若くは其他の器物を使用するのである、提柄のあるものを使用するは、唯た躰裁に止まらず、提携の便等もあり、旁々之を使用するので、花籠と言へば一般に提籃形を使用する事になつて、居る位である、然れども時には提籃形でない、即ち提柄のない盛花器同樣の籠をも使用する事あれども、是は實に稀有て、唯だ僅に使用しても差支ないと云ふ事になつて居る。

(二)花卉類の事

花卉類は盛花に使用せらるゝだけのものは、何れも使用せらるゝのであるが、其他特に、纏繞性の花卉が入用てある、即ち蔓ものが入用である、是は盛花と異つて、籠の柄に纏わせるので、此の柄の有無は最も著しく、盛花と違ふ所である。

花卉類は盛花の部に述べたれども、特に纏繞性のもののみを摘記せば

スミラツクス…是は敷花にも使用する蔓ものてあつて、盛花の普通盛には使用せぬが、花籠には欠く可からざる愛らしき蔓草である。

アスペラグスプリモサ…是は盛花にも敷花にも使用する、蔓性の

アスペラグスであるが、花籠には尙更必要なるものである。

モーランヂヤ：是は普通の盛花には使用しないが、敗花には使用する愛らしき蔓草である、花籠には尙更必要で、殊に葉柄の特異の卷き方を爲す、珍奇のものである。

オカメツタ：是は普通の盛花には使用せぬか、敗花には四季使用し得らるゝ、本邦在來の蔓性植物で、花籠には四季使用せらるゝを以て、採收に便なる蔓ものである。

ヒカゲノカツラ：是も普通の盛花には使用しないが敗花には使用せらるゝ蔓性のもので花籠にも適用せらるゝものである。

以上は其の蔓性の、使用せらるゝ二三を擧げしに過ぎないが、總て斯かる纏繞性のもの、又蔓草の如きものは、此の花籠の提柄に纏繞せしむる爲め使用せらるゝものであつて、其他是に類せしものは、皆應用する事が出來るのである、單に蔓ものの、花籠の提柄に纏繞せしむべきでないが、普通は蔓物であるけれども、極上等の花籠になると、蘭科の花を纏繞せしむる事もある、即ち長き花梗に數多の着花を爲し居る、オンシヂュームの類、又シンビヂュームの類、又はパンダー或はファレノプシスの類の、斯かる花を撰びて使用する事もある、斯かる場合には、是に準じて籠中の花卉も、無論上種のものを使用するのである、是等は盛花の夫れと同じて、其の花卉のみの代にても、不廉の價格となるのである、今日本邦に於て斯かる花籠を送呈するもの、容易にあらざる所なれども、將來は珍らしからざる事實とならん事を望むのである、又遠からず一般の程度が進むと共に、贈呈用の花籠の品質の撰擇の度の進むと亦信して疑はない。

(三)チュール、リボン、水苔、竹串、糸の事

チュール

是は花籠の最も上等なるものに使用する付屬品であつて、細き白木綿糸にて製したる網である、本邦の熨斗を使用するが如く、進物用の印に、裝飾をかねて、使用するものである、其の着くる場所は、提柄の右方に、上等の花卉を纏繞せしめたる時、其の左方の提柄に、纏繞せしめて、花籠の下部を一周せしめて置くものである。

リボン

是は絹地製のもので、進物用のものには、必ず之を添付する事、本邦の熨斗を使用するのと、殆ど同樣であつて是は殊更、裝飾を

兼ねて居るのである。

水苔

是は水中に生ずる苔を、乾燥して貯藏し置き、使用するに當りて水に浸し、保濕の用に使用するものである、詳しきは盛花の處にて述べたれば、參照あれば宜い。

竹串

是も盛花の處にて述べしと同じて、竹を割りて長さ四五寸位の、團子の串、同樣のものを拵へるのである、而して之を花卉類の足に接ぐ事は、盛花の夫れと同じである。

糸

是は木綿糸にて、竹串を花卉の足として接ぐ時、又は水苔を花器に詰入るゝ時、之をその花器の形に、縛るのに使用するのである。

其他筆とか、海綿とか、花卉の掃除用に、必要なるものあり、又霧吹器とか、花函とか、入用あれども、是等は盛花の處にて述べしと同じければ、同記事を參照して、其の品質及用途の詳細を知るべし、尤も盛花の如きは、必ず其の所用の場所にて、花を盛るのが一般の例なれば、準備したるものは、不殘一先づ花函に納め、所用の場所へ持行き、其處にて函中より取り出して、盛花器に盛るのであるから、霧吹器の如きも、持行かざるを得ないのであるが、花籠は、大躰花器に挿し終りたるもの、即ち花籠の出來上りたるものを、所用の購買者に渡すものにて、霧吹器を持行きて、使用する事もなければ、又花函に入れて、持行く用もない、一切花卉を挿し終り、霧吹きかけ、チュール又はリボンをも着けたるものを、需用者に渡すと云ふ事になるから、器具類や、附屬品は、勢ひ茲に列記するの必要は、ない故に要用なるもの二三を擧げて他は略す事とする。

花籠の拵方の事

花籠の拵方は、盛花と殆ど同樣であつて、先づ前記の材料を取揃ねばならぬが、其中にも先づ花器を撰ぶ事が、最も先きである、故に圖中の花器中、適宜之を撰び其の器物に應じて、花卉類の種類、及其の數量を算定しなければならぬ、花卉類の概算が出來、其の概算だけの花卉を、買入るゝか、自分の花園より截收するか、何れにても其の入用丈けの、花卉類の準備が出來たならば、之を適宜の寸法に短く切り直し、即ち花籠に使用する寸法であるから、花卉に依りて、種々長短の差もあれども、其の大多數は、大概三四寸に切り、而して其の切り直したる花卉を、一々能く掃除しなければならぬ、

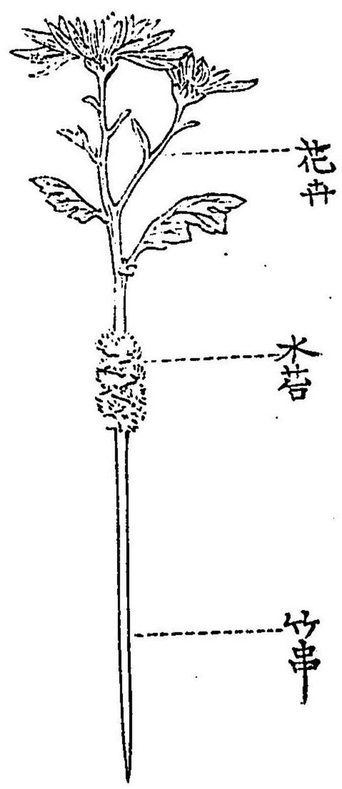
即ち盛花に於けると同様である。

虫類の花瓣内に隠れ居るもの、又は葉裏に附着し居るものを撿して之が驅除を爲し、又葉面等に汚れあるものは、能く之を掃除しなければならぬ、其の虫類の驅除の仕方、又は汚班の掃除の仕方などは盛花と同様なれば、已に記述せし盛花の處を參照して、其の方法を了解すべし。

花卉類の掃除が終れば、其の花卉類には一々竹串を接けねばならぬ、其の竹串の接け様は、失張り盛花と同様であつて、適宜の寸法に截りたる、花卉の其の截口に、水苔の濡れたるものを充て、其の截口を包む様にして、其の側へ竹串を添付し、花卉と水苔と竹串と此の三つを、一所に木綿糸にて縛りつけ、左圖の如く爲すべし

又花卉類中にても、或ものは數本を一纏めにして一本の竹串につけるものあり、例せばスミレの如き小花のもの、又花卉一本に一本の竹串を接けるのもある、是は普通であるが、中には一花に二本乃至三本の竹串を接けるのもある、例せばアマリリスの如き大なる花である、又或る花卉は長く、或花卉は短くする等種々の區別もあるが、夫れ等は皆盛花と同じ事なれば、詳細は盛花の處にて了解せらるゝが宜い。

（三）



又蔓ものは可成長き儘に、一本乃至二三本を一纏めにして竹串を接けるが宜い、是は此の蔓を、籠の提柄にからませて、裝飾かたがた、其の柄を隠すのであるから、余りに多くからませるのも面白からず、又余り少いのも面白からねば、其のからませる蔓ものの種類に依つて、或は一本、或は二三本と區別を立てて、竹串の足を接けるのである、此の加減を以てせば、蔓ものの種類によつて、其の區別を爲す事、大概推察が出來樣と思はるゝのである。

斯く花器も定まり、花卉類の概算も立つて、截り取りたる花卉に、竹串も接き終りたれば、愈々花籠に花を挿すのであるが、其の花籠に花を挿すのも、盛花と殆ど同樣であつて、先づ花器中へ水苔を詰め、而して花卉類を挿すどだいを拵ねばならぬ、其の水苔を詰める仕方は、先づ濡したる水苔を花器の形に準してまるめ、例せば丸き

花器なれば丸く、四角の花器なれば四角にして、夫れを輕く木綿糸にてからみ、而して其の花器内に入るゝのであるが、是は水苔のみ、其儘詰込みては、花卉を挿込みても、根締りあしく、動もすると、挿したる花卉類が傾く事もあり、左なくも動き易くして、配置を亂して宜しくないから、糸にて水苔を輕くからみ置くのである、元來水苔は、粘り氣などは少しもないものであるから、是非之を必要とするのである、而して其の花卉の形にして、木綿糸にて輕くからみつけた水苔を、ソックリ花器の内へ詰め入れ、尙ほ花器との間に、隙を生ずる樣な事あり、水苔に不足を生じ居る場合などには、其上に更に水苔を詰込みて、而して水苔の總躰の量は、花籠の緣の高さにするを度とするのである、是等下拵の事は、盛花の夫れと同じであるから、尙ほ盛花の處にて說明した記事をも參照せられたいので

ある。

而して又花卉類を花器に挿すには、矢張り盛花の如く、ヒバを花器の内周圍に挿し、夫れから花器中全體に、水苔が隠れるを度として、ヒムロを挿すのである、此のヒバは竹串の足を接けずして、ヒバの枝のもとを挿すのであるが、ヒムロは短き竹串の足を接けるのである、是等の區別も盛花と同樣であつて、同所にて詳しく説明し、置きたれば、尚其を參照せられたきものである、而して此のヒバと、ヒムロを盛花にも亦花籠にも使用する事は、歐米に於てはなき由なれども、本邦にては、是が材料が多いから、四季容易に使用する事が出來、甚だ便利であつて、且經濟上にも宜いから、之を使用する事になつて居る、斯かる例は一般の材料にも、數多く出來る事を望むのである。

斯く花器に水苔を詰め、其上にヒバとヒムロを挿し終りたれば、愈々花卉中の眞とするものを挿すのである、此の眞は盛花に於ける眞と同じて、眞の挿方に依つて、總ての標準が定まるのである、故に花器に依つて眞の高低があり、又花卉に依つて眞の高低もあるから、眞の極め樣によつて、花の挿方が極まるのであつて、眞の挿方は最も大切である、眞の極め樣に二通りある、即ち一は花器の中心を眞の位置として、其處に挿すのと、一は花器の中心より右に外して、眞の位置を定め、其處を眞の位置として挿すのとの二つであるが、是は提藍形の花籠、即ち提柄のある籠を、花器として挿す場合であつて、提柄のない籠を、花器として挿す場合は、盛花器と同樣であれば、其の挿方も盛花と同樣である故、眞の挿方も必ず提藍形の花籠の如く、花器の中心と又花器の中心より少しく右に外したる位置

との二つに限つたものではない、故に全體より言ふ時は、眞の挿方は、花器の中心を、其の位置とするとの、又花器の中心を、左右に外したるのと、三通りになるのであるが、花籠は提柄のない花器を使用して、盛花同樣の花籠を爲す事は、稀有であるから、自然花籠の眞の極め樣は、前述の中心、及其の右に外したる分の位置との二つが、普通である、今眞を花器の中心に挿したる分として、挿し始むれば

先づ中心に眞とすべきものを挿し、次に其の位置を中にして、其の左右に前後に、花色花容を見計ひて、適宜の花卉を挿し、如斯して漸次中心を去りて、周圍に及び、最終の周圍に至つて、垂下する樣のもの、又はベコニヤレックスの如き、大葉のものを挿し、又眞を中心として、其の前後左右の位置て、際花器の全體より見たる處は、

四方面の中央に當る處へ、アジアンタムの如き葉ものを、少しく高く挿すのである、アジアンタムの如き細き小い葉ものを、全體の花卉を挿し終りたる、其の上へ少しく高く挿す時は、前きに挿したる即ち其の下になる花卉が、細き小なる綠葉を透して見る樣になりて、其の彩色の配合等より一層に美しく見ゆるのである、而して最終に、提柄にからませる蔓ものを挿し、其の蔓を提柄に右まきに卷きつけるのである、而して蔓のまきつけが終れば、夫れて全く出來たのであるから、霧吹器にて細霧を吹きかけ、而して提柄の右方の上部へリボンを結び付くるのである。

此のリボンの結付けは、裝飾が主であるから、右方の上部へ一ヶ所結付けたる外、尙ほ左の提柄の下部へも、結び付くる事もあるのであるが、普通は右提柄の上部へ、一ヶ所結び付くるか例である、リ

ポンの色は桃色、白、紅、紫等種々あるか其の色を撰ぶのは、挿したる花の色に配合の宜しきが肝要である。

左に花籠の實例を示し、是が材料たる花卉類及其の他のものをも解說せん。

但し總て花籠の大小及形狀は、何れも其の好む所に從ふものなれば、一々是が大小寸法を記載せず。

第一實例

第一圖に示したる花籠は本邦在來の植物を主要なるものとして挿したるもの

一　椿……中央ある大輪の花は即ち是である。

二　薔薇……前面中央の下部にある大輪の花は、即ち是である。

三　於龜蔦……籠の提柄に纏繞せしめあるものは即ち是れである。

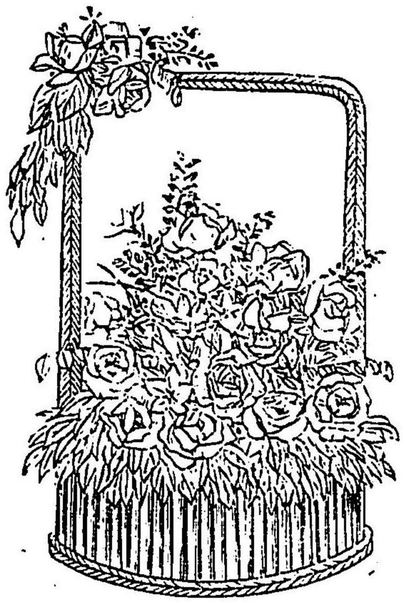
(一)

四羊齒…前面中央の最上部及其他周圍に使用せられたるもの即ち是である。

其他下草として使用せるもの、尙ほ數種あれとも、此處に列記するを略す。

第二實例

（二）ぬ



第二圖及第三圖は共に花籠の異例を示したるものである。

第二圖に使用せる花卉の重なるものは

一薔薇…全體に多數、此の花を使用

せり、但し種類と花色は何れも異なりたるものなり

二百合…各種の種類を集め、花容花色を異にしたるものである

其他種々なる葉ものを以て、其の下部と間隙を塞ぎたるものである。

第三實例

（ぬ）三

第三圖に使用せる花卉の重なものは

一百合…全躰に多數、此の花を使用せり、但し花色は種々なのを使用してある、

二ダリヤ・是は左方に、菊花形にて挿され居るもので、ある。

三リラ…は各所に挿されて、垂下狀になつて居るもの、又斜に立てるとある。

四ベコニヤレックス…右方の提柄に附着せられある、上方の分と、左方の下部との二ヶ所にあるもの。

五スミラックス…是は提柄に、纏繞せられ居るものである。

六アジアンタム…是は垂下狀に、挿されある、葉ものである。

附言　此外使用せる花卉あれども此處に列記するを略す。

第二圖に示したるは、花籠に纏繞性のものを、其の提柄にからませざる異例を見せる爲めと、且斯かる場合にはリボンを着けず、即ち左方にある花卉が、リボンにも亦蔓ものを、からませる代用とても見て、宜いのである。

又第三圖にあるのも異例の一であるか、右方の提柄にある花卉は、即ちリボンの代用をも兼ぬるものと見て宜し。

花束法

花束とは專ら婦人に贈る花束を云ふのであつて、花籠と云ふ贈り花の如く、大いなるものではない、多少大小の別はあるけれども、大概は婦人が片手にて、容易に持ち得らるゝ位の重量で、其の形狀も周圍の直徑を、五六寸より七八寸位を度とするのである、普通使用

するものは、花色を撰ないが、婚姻の時などに使用するものは、白花を用ゐるの例がある、左に是に要する材料を摘記せば。

一　花卉
二　臺紙
三　線鉛紙リボン

(一)花卉の事

花束に使用する花卉は、殊に花色花容の艶美なる、且可成は芳香を有するものを撰ふが肝要である、而して盛花に於ても、花籠に於ても、襟挿に於ても、さうてあるが、殊に花束に於て尚更此の必要あるは、半開の花卉を使用する事である、十分開きたるものは、已に其の用に適せざれば、可成また十分に開かさるものを採用する、是

迄使用し來りし花卉の中、重なるものを列記せば、左の如し、花卉の形態等の説明は、已に盛花の花卉中に記しあれば、茲には省畧して只だ僅に其の名のみを擧ぐ

ジャサント(ヒヤシン)ト各種、　フリヂヤ各種、　プリムラ(櫻草)各種、　ヘリオトロップ各種、　ブバルヂヤ各種、　スミレ各種、
オレゼタ各種、　カルセオラリヤ(巾着草)各種、　シヂラリヤ各種、
オイエー(香撫子)各種、　アヂモヂ各種、　ペチユニア(ツクバツヂ
アサガホ)各種、　リラ(ララツク)各種、　ミユーゲー(鈴蘭又君影草
各種、　マリゴールト(萬壽菊)各種、　シクラメン(豚の饅頭)各種、
ゼラニーム(天笠葵)各種、　コリウース各種、　アジアンタム各種、
蘭類各種、
其他在來の花卉中重なるもの、又新種の花卉にて美なるもの皆使用

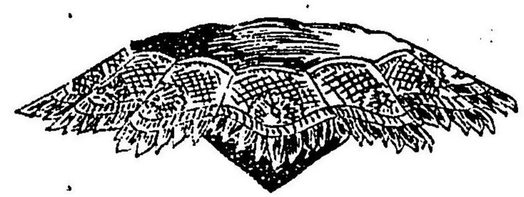
せらるるのである。

(二)臺紙の事

臺紙とは花束の柄に篏めるもので、多くボール紙にて製し、其の上

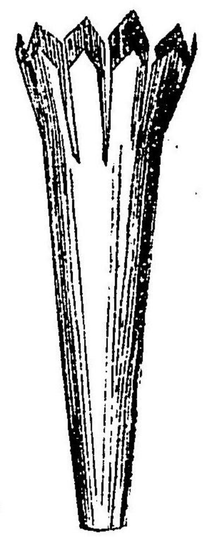
(一)

る



(二)

る



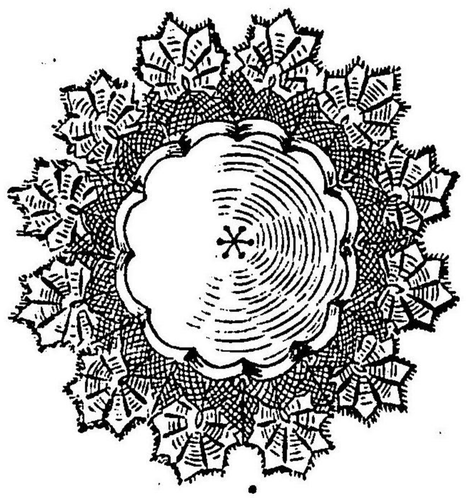
面の裝飾條を、薄き紙、又は絹地木綿地にて製したるものもある、色は一般に白てある、今之を圖にて示す時は左の如きてある、上なる皿形のものへ、下なる筒形のものを篏めて、使用するのである、第一圖は臺紙を側面より見たるものにて、第二圖は臺紙の附屬で、

(三)

る

(四)

る



即ち柄に篏め、第一圖の臺紙に付着せしむるものである。

第三圖は第一圖のものと同品であるか、只だ其の裝飾椽の少しく異なれるを、示すのみである、尙其外にも種々異なれるもののあるとをも示すのである。

第四圖は上面より見たる全形であつて、裝飾椽とて即ち中央圓形の凹所を除き、其他椽になり居る處は、多少相違はあれども、其の大體に於ては第一圖も第三圖と上面より見る時は同じく第四圖の如くなるものであると云ふ事を示すまでの圖である。

第三圖と第四圖とを對照して見れば、此の臺紙の形狀は、如何なるもので、あると云ふ事が分るであらう、即ち花束か這入る樣に中央か凹み、其の凹みたる周圍に美しき椽あり、是が裝飾になつて居る、而して其の凹みたる處へ、花束の柄に當る處を、外へ貫く樣に挿し

入れ、其の花束の柄が、臺紙の中央の處より下へ出て居るから、其處へ第二圖の柄臺紙を篏め、入るる樣に、なつて居る裝置か、分るのである。

(三)線、鉛紙、リボンの事

線――は銅製の細小なるものが宜い、此の細小の線で、花卉を矯める樣に使用する分と、又卷きつくる分と、二通りに區別して置く必要がある、矯めるのに使用する分は。其儘、五六寸の長さに切り置くのであるが、卷きつくるのは柔くする必要があるから、之を藥火にて燒き、而して糸卷樣のものに卷き直し置き、何時でも使用し得らるゝ樣にして置くのである。

鉛紙――とは通俗銀紙と稱し居るもので、彼の壜の口などを密封す

る爲め卷きつけあるもの、即ち是てある、襟挿の處にて述べしか如く、舶來の銀紙とても云ふべきものてある、是は花束の柄の處を是にて包み、裝飾を爲すので、花束の柄は臺紙に挿すゆゑ、斯かるとは臺紙を用ゐざる時の、略式てある。

リボン――とは花籠の處にて述べしか如く、絹地にて製したるもので、今日一般に婦人の髪飾りなどに、使用せらるゝから、別に説明の必要もないのてあるか、是は花束の柄に結付くるものてある。

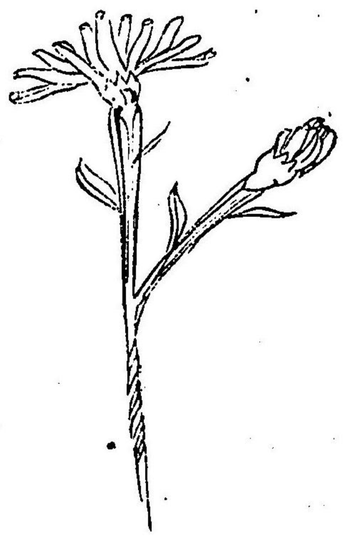
花束の拵方の事

花束に要する、前記の材料の準備か出來たならば、愈々花束の拵方に取掛るのてある、花束は盛花や花籠とは大に其の趣を異にして、且つ特歩きなどする事あるゆゑ、花卉か動きて、夫れか爲め花と花

と擦れ合、其の美を損せぬ樣、花卉の動かぬ樣に、又花梗の曲れるものや、或は枝の弱きものなと一々之を線にて矯め置くのてある、是に使用する線は藁火にて燒かぬ分てある、其の線の挿し方等は、襟挿の婦人用にする處にて圖解せしものと。殆ど同一の理てあるが、左に花卉の矯め方、及び線の卷き方を示す時は左圖の如きてある。

（五）

る



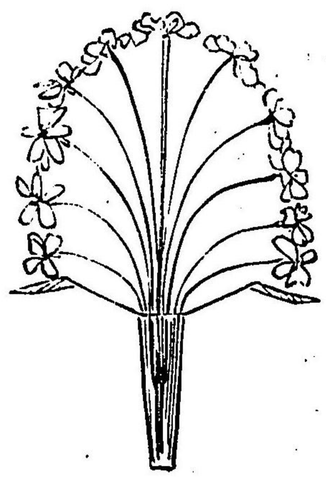
第五圖に示したる如く、花束用に截取りたる花卉を線にて矯めると云ふのは、花卉の莖又は枝に線を卷き、自由自在に其莖又は枝を矯めるのてある、矯めるとは曲つた莖又は枝なれば、之を眞直に直し、

又眞直の莖又は枝なれば、之を曲げるのである、是は其の矯め樣と思つて居る莖又は枝に線を卷き、其の線と共に之を爲す時は、實に自由自在に矯めらるゝのである、是は線の彈力に依る事であるから、細き線にて、如何樣に大い莖又は枝でも矯めると云ふ事は六ケ敷い無論其の線の彈力以上のものは矯める事が出來ぬから、若し莖や枝が太くて、其の線にて矯められぬのは、其の線の彈力の足りないのであるから、其の線より一層太く強きを以てせば、矢張り容易に出來るのである、其の莖又は枝より強き彈力ある線を用ゐたならば又自由自在に矯める事が出來る、夫れて是れは如何樣にして線を花卉の莖又は花梗に卷くかと云ふに、第五圖に示したるが如く、花の蕚の處へ線を挿し通して、夫れを下へ交互卷きつけて行くのである、其の線の挿方及び其の線を下方へ卷きつくる事は、已に述べ來つた

襟挿の處の第一圖及第二三圖を參考せば了解に易からん。

花卉を矯める事が出來、一々線にて花束に使用する丈けの、花卉に線を卷き終りたれば、例せば左圖の如く

（六）る

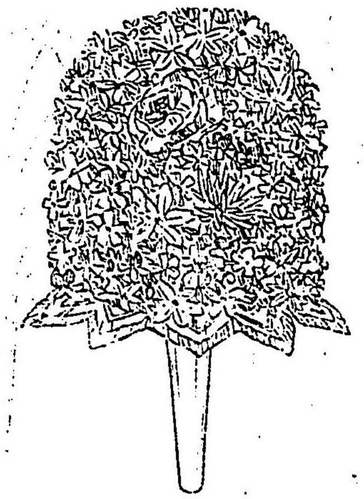


第六圖は花束を縱斷面に爲したるものにて、其の全體は第七及第八圖の如てあるから、是等の圖解を斟酌して、花束を拵るは困難にあらざるべしと思ふ。

其の順序を述ぶれば、先づ中央の眞となるものの下拵、即ち線卷きが出來たれば、夫れを中央に置き、其の前後左右に、線卷きの花卉を添へ、之を其の中央の眞の二所に柔き線にて卷きつけ、又其の周

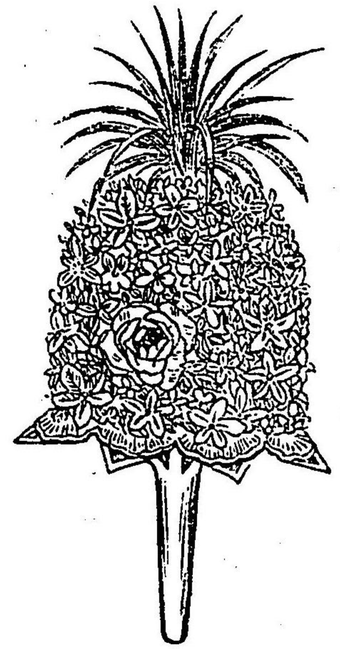
第一實例

（七）る



第二實例

（八）る



圖に、同上の花卉を添へ、之を一所に線にて卷きつけ、漸次其の數を增加して、第六圖の形に、外部が鈍圓錐形になる樣にするのである、而して花卉を斯の如くして結束し來り、殆と眞徑が五六寸位になり、重量も婦人の片手に持てるを度とする位になれば、最早花卉を添ふる事を止め、

線にて花の足を堅く束り、第一圖の臺紙を其の足に挿し、又第二圖の附屬臺紙を其の挿したる足の先きに嵌め、而して第七圖の如くするのである、即ち第七圖及第八圖は、即ち花束に第一圖及第二圖の臺紙及附屬臺紙を嵌挿したる所である。

第六圖の如き形狀に拵へ始め、第七圖及第八圖の如く出來上り、臺紙も嵌挿し終りたるものは、是にリボンを結び付くるのである、リボンを結び付くるは、附屬臺紙を嵌めたる、花束の柄に、結ひ付くるのが、一般である、リボンを結び付くれば、是れにて全く花束が出來上つたのである。

臺紙の附屬臺紙は時に使用せぬ事もある、斯かる場合には、即ち鉛紙にて包み、以て附屬臺紙の代用をなさしむるのである。

花輪法

花輪とは葬式の際、棺箱を裝飾するものであつて、無論是は基督教式に屬するものである、本邦在來の葬式用の花とは、其用途に於て差異あると同時に、其の形狀に於ても、亦大に差異あるものである。

花輪に要する材料

花輪は左記の材料を以て拵へるのである

一　花弁類及乾燥葉

但花弁は何種を問はざれども、余り性質の柔弱ならざるものが宜し、又乾燥葉は蘚鐵等の類

二　大小線

是は花輪の原形、即ち骨組を造くる等に使用す

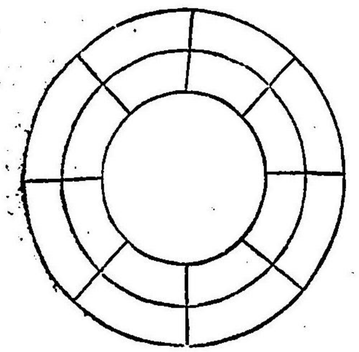
三　水苔

是は盛花や花籠に使用せるが如く、水分補給の爲めに使用するものてある

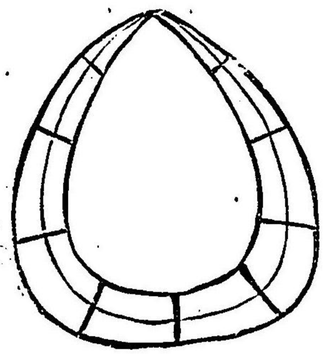
花輪の拵方の事

花輪を拵へんとするには、先づ線を以て左圖の如きものを製し。之を

(一)



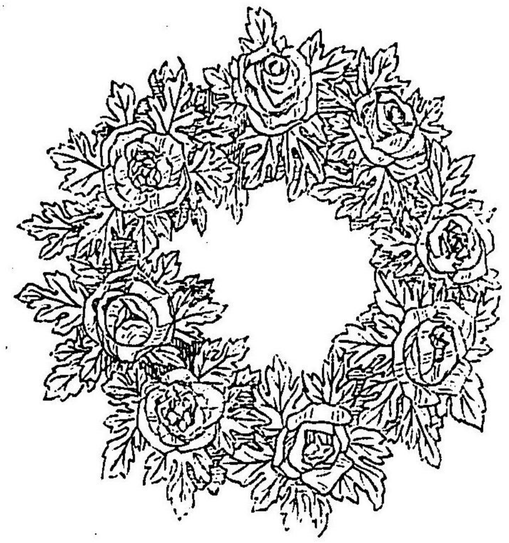
(二)



を同一のもの二重にして、其の中間に水苔を認め、夫れに花卉を着けて、第三圖又は第四圖の如くするのである。

第一實例

（三）を



今其の拵方の順序を述ぶれば左の如しである。

第三圖の如き花輪を拵んとするには、第一圖の圓形の分を二重となし、其の合せたる間の明きは。五六分より一寸以内として、之を線にて結束し、其の中間に水苔の濕したるものを詰め込み、其上へ先づ最上部の花卉より着け始め、之を細

線にて結束する事前同樣にして、左右とし順次下方へ着けゆきて、中央にて合すのである。

是に要する花卉は、可成丈夫なるものゝ方が宜いが、半開若くは半開少し過ぎたる位のものなれば、何の花でも宜いが、さればとて朝顏の如き、早く凋衰するものにては、又其の用を爲さず、花も葉も美なるもの、例せば椿又は山茶花等の如きものなら、枝とも短く截りて、葉も花も其儘使用し、前述の順序を以て、上部より下部へと着けゆき、中央の下部にて接合すれば、夫れで宜いのであるが、然らざるものにては、葉は別に葉のみ葉の美なるものを採り來り、又花は花のみ採り來りて、先づ葉より花、葉より花と、矢張り前述の順序にて着くるのである。

第三圖は全く薔薇にて拵へたるものゝ一例に過ぎない、

第四圖の如き花輪を拵へんとするには、第二圖の卵形の分を二重となし、其の合せたる間隙を、五六分より二寸以内として、之を細線にて結束し、其の中間に水苔の濕したるものを詰め込み、其の上へ、先づ最上部左右何れからても宜いから、葉ものを着け、細線にて結束し、順次下部の方へ着けゆき、中間に花を配着し、順次葉又花と着けゆきて、最終中央に最も美しき花にて止める樣、此の中央の着け方、又裝飾方は、特に注意を要する事であ

（四）を

る。

第四圖に使用せし花卉類は本邦在來のもののみにては

中央の花を薔薇として

中間の花を躑躅花として

葉ものは枇杷と讓葉なり

又之に西洋花卉類を使用する時は

中央の花を洋種薔薇花として

中間の花を重瓣ペチュニアとして

葉ものはクロートンなり

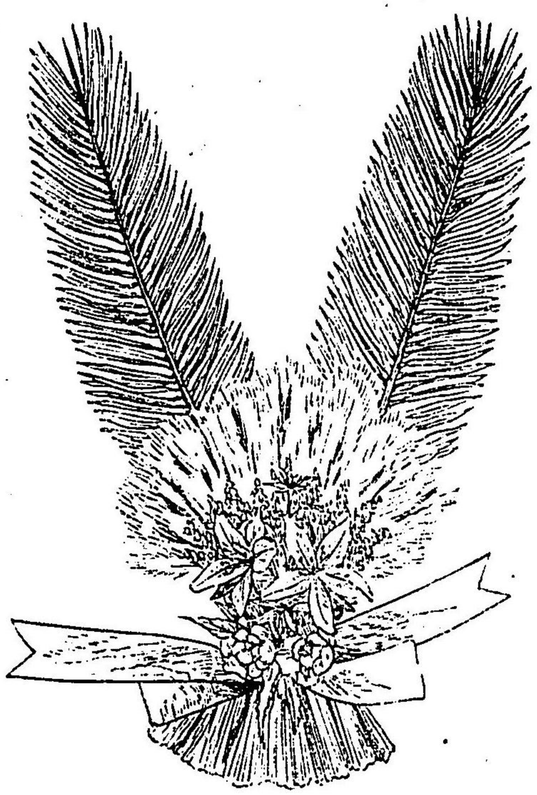
以上の外形狀にも十字形其他あり、又花卉に於ても種々あれば、其の配り方に於ても種々あれども其の大躰に於ては同じである。

第五圖は乾燥せる蘇鐵葉に、萱の穗を以て大體を製し、中央の裝飾

に薇薔に百百等を使用せしもので、形狀も亦異例とするのである。

第三實例

（五）を

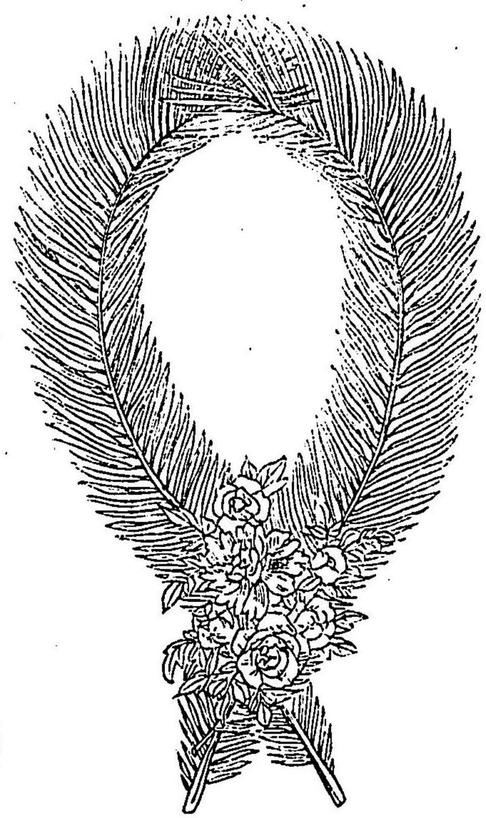


第六圖は乾燥せる蘇鐵葉に薇薔を以て製したる、簡易の花輪である。從來儀式的に使用し來りし、花輪の形狀及拵方の概略は已に述べし

が如くであるが、儀式的以外近頃葬式用の送花として盛花を贈るものあり、又花籠を送るものもある由に聞くが、是は強ち可笑てないと思ふ、茲に最も笑ふべく、且つ不注意極まれる話あり、そは花束と花輪と間違し奇談である、或人知人の婚姻するを祝するが爲め、

第四實例

（六）を



花束を送らんとて、花屋に命じて之を調製せしめ、婚姻の儀式を擧ぐる會堂(會場)に持行く事を命じたり、花屋は其の花束の調製方を十分解せざりし爲め、曾て調製せし事あつて記憶せる花輪の事を思出し、殊に式場が會堂であるゆゑ、愈々夫れと決心して、遂に葬式用の花輪を調製し、擧式の當日持來りて、之を出したる故或る西洋人之を見て、大に怒りしと云ふ事である。

如斯誤謬は自今あらざるべけれど、是に類せし誤謬は將來尙ほ之を絶たしむる事、到底保ち難いのである、望むらくは此の小冊子、幸に幾分か此の欠を補ふ事を得たなれば編者の幸は實に己れ一個に止まらないと思ふ。

盛花と贈花をはり

明治四十一年三月七日印刷
明治四十一年三月十日發行

盛花と贈花奥付

定價金六拾五錢

著作者　宮川孫二郎

發行者　東京市本所區向島須崎町百七十九番地　代表者　吉野濱吉

印刷者　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地　佐久間衡治

印刷所　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市本所區向島須崎町百七十九番地　東京園藝株式會社出版部

最新出版書類

梅田矯菓先生著
果物菓子手製法
全一冊
定價金五拾錢
郵稅金六錢

久田二葉先生著
家庭園藝之栞
全一冊
定價金壹圓
郵稅金八錢

山下、加藤、多湖先生共著
日本
野生植物圖說
第一輯一冊
定價金五拾錢
郵稅金四錢

鈴木千代吉先生著
害蟲燻殺法
全一冊
定價金廿五錢
郵稅金四錢

山下脇人先生著
動物營養論
上卷
定價金一圓廿錢
郵稅金八錢

東京市本所區向島
東京園藝株式會社出版部

31
476